群雲の送火

ceryeti

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
群雲の送火

【Ｎコード】
Ｎ１１９８Ｒ

【作者名】
ｃｅｒｙｅｔｉ

【あらすじ】
桐ケ谷好基は、夏休みに入る前に死んだらしい……。
バイトを終えて下宿に戻ろうと自転車に乗ったところまでは覚えているが、気付いた時には“こっち”の世界にいた。なにがあったのか全く身に覚えがないが、とにかく死んだということを教えられて、有無を言わさずこちらに放り込まれた。どうも交通事故にあったらしい。
八月の旧盆には幽霊として故郷に帰らないといけない？
いつの間にか知り合った、先祖を名乗るいつの時代の人なのかまる

でわからない謎の女幽霊に案内され、故郷帰りをすることになった……。

残念な早死大学生、好基と、謎の姫御前先祖（？）偲の、お盆休み幽霊系コメディ。

のつもりです。

第1話（前書き）

また新連載です。
作者名は架空の人物です。
読んでいただけたら幸いに思います。

第1話

「群雲の送火」

＞i１８８００―１９８５＜

「暑いのう。好基よ、まだ着かんのか？」
「まだみたいです。もう、さっきから後ろで暑い暑い言わないでください。次言ったらおいてきますよ？」
山また山、木々のまばらな尾根道を一頭の馬に乗った和服姿の男女が行く。男は甚平羽織、女は浅葱の単物という出で立ちだ。
「しかしなあ、こう暑くては身に応えるというものよ。山の上だというのに少しもしのぎやすくならぬ。一体どこまで来たのだ？はて、ここはどこだ？」
好基と呼ばれた男の後ろで馬の背にゆられながら、女が気だるそうにたずねる。
「はてって、最初からどこを進んでるかわかってないのに今迷ったみたいな言い方しないでください。どっかの山の中ですよ。偲さん、冗談抜きで場所わからないんですか？ここ何度も通ったことがあるんでしょう？」
「ううむ、あるんだろうが、景色に覚えがないわ」
難しそうな顔をして偲がうなる。
「ハハハ……、どうしようもないですね。のろしは全然見えてこないし、このままじゃ帰れないですよ？オレたち。よくわからない山の中で野垂れ死にですか？」
「その心配はいらんよ好基。おぬしはもう死んでおる。目的地に辿り着くまではどういう道を通り、どういう景色に出くわすかは全くわからぬ。それが真旅というものじゃ。のろしが見えるまではあせ

らず気長に行こうぞ？」
「とか言って、文句ばっかりなのは偲さんの方じゃないですか。まったく」
手綱を握りながら好基が口をとがらせる。
偲とともに馬上の旅を続けて、もうどれくらい経っただろう。のろしが見えたらそこが目的地。そう教えられて出立したはいいが、ここまで道なき道を行くあてのない旅だった。
どうしてこんな難しそうな姫御前と、情緒のかけらもない旅などに出たのだったか……。

桐ケ谷好基は夏休みに入る前に死んだらしい。
バイトを終えて下宿に戻ろうと自転車に乗ったところまでは覚えているが、気づいた時には“こっち”の世界にいた。
多分交通事故かなにかだったのだろう。なにがあったのか全く身に覚えがないが、とにかく死んだということを教えられて、有無を言わさずこちらに放り込まれた。よく言う黄泉の国というところらしい。本当にあるとは思わなかったが死んで放り込まれた先なのだからそうなのだ。
結局２０年という短い生涯を終えたらしいのだが、幕はまだ下りないようだ。悲しむ暇も、人生を振り返る余韻も与えられぬまま、こちらでの生活が始まった。
「好基！おい、おぬし！さては好基か？おおい！」
浅葱の単物を着た若い女が、新参の好基を見るなり目を丸くした。
「え、ええ。そうですが」
「おお、やっぱり好基か」
女が駆け寄ってきて手を握る。知り合いのようだが見覚えがない。
「うむ。会えてうれしいぞ。やや、だが……、ここにいるということは、つまりおぬしもくたばったということか？」
「ずいぶんな言いようですが、まあそのようです」
「ほほっ、そうかそうか。それは若いのに残念だったなあおい」

女は少しも残念そうな様子もなく、好基の肩をたたいた。
「ああ、ところで、失礼ですがどちらさんで？」
「む、好基よ、おぬし妾のことを知らぬのか？それとも久しぶりすぎて忘れたか？」
女は意外そうに、ここでようやく残念そうな顔した。
「妾なんて知らないですって。ていうか一体いつの時代の姫様ですか。会ったことがあるなら謝りますけど」
「いや、そうだったな。知らぬのも無理はない。すまぬ申し遅れた。妾は桐ケ谷偲。おぬしが生まれる前に死んでおる」
「そうですか。なら知らないですよね。偲さんもその若さで？」
「左様。美人薄命というだろう？」
これはなんとつっこんだものか。偲は自信たっぷりにふんぞり返る。
「ええと、でも生まれる前に亡くなってるのなら、どうしてオレのことを知ってるんですか？そういえば名字が同じですけど」
「それは妾がおぬしの先祖に当たるからじゃよ。何代さかのぼるかは知らぬが、陰ながら見守っておった」
「そうだったんですか。それでオレも、死んでめでたく先祖と再会ってわけだ。シャレにもなりませんね」
「余興ぐらいにはなろうさ。しかし、桐ケ谷家も久々に見どころのある男児が現れたと思ったというに、死んでしまっては情けないのう。うっはははは！」
いかにもおもしろい話を聞いたといった風に、偲は片手で腹を押さえ、片手で好基を指差して高笑いした。（死んでいるが生きる希望をなくした）
２０歳での死という受け入れがたい現実に直面し、まわりは年寄りばかり。そんな中最初に声をかけてくれたのがこの偲という先祖（？）だった。
「ここに来るのは死んだ人間だからいろいろな者がおるが、大抵は年寄りじゃ。妾もずいぶん退屈したぞ？」

「じゃあオレたち早死に同士、仲良くしましょうか？」
「そうさな。おぬし話がわかるではないか。どうじゃ？もうじきなんだが、次の盂蘭盆会、妾とともに行かぬか？おぬしは初めてだから案内役が必要ぞ？」
「ああお盆ですね。やっぱり幽霊だから八月は故郷に帰るんですか？」
「幽霊ではない、霊魂じゃ。我々は毎年故郷に帰っておるぞ。道中長くなるが旅は道連れというもの。年寄り連とは別に真旅を楽しむのも悪くはなかろう？」

ということで始まった旅だったが、この案内役がまったくの役立たずだった。
一頭しかいない馬にゆられて山に海に、もう何日経ったのかもわからない。
「偲さん、これ、道に迷って故郷に帰れない先祖っていうオチなんじゃないですか？黄泉から実家までどうつながってるか知りませんが知ってる景色なんて一向に見えないですし」
「案ずるな。現し世と隠り世の境は朧にして常に揺蕩うておる。旅は無為に続けども、我らのためののろしは必ず我らの前に上がるものじゃ」
後ろの偲の声はいたって真面目なものだ。やはりこうして毎年里帰りをしているのだろうか。
「しかし暑いのう。今年は異常ではないか？先月まで向こうにおったのだろう？どうだったんじゃ？」
「異常もなにもありませんでしたよ。まだ六月でしたし。ていうかオレたち幽霊なんだから暑がってどうするんです？」
「暑いものは仕方がないだろう。幽霊が暑がってなにが悪い。おぬしは先入観にとらわれておる。幽霊は冷たいとかスケスケとかそういうのだろう？そんなもの誰が決めた？それに幽霊ではなく霊魂だと何度言ったらわかるのじゃ」

「どっちでもいいじゃないですか自分で言ってるくせに。ああもう、暑いんだったら脱げばいいでしょその暑そうな上着。後ろで文句ばっかり言われちゃかないません」
「暑そうとな？これは帷子という単物じゃ。よく覚えておけ小僧。昔の人間は暑い夏にこれを着たんじゃ。だから下にはなにも着ておらぬ」
「いやいや、だからって、話つながってないですから……。ていうか、ああもう！スケスケなんだか下に着てないんだか知りませんけど、暑い言うの禁止！」
「やあ、見えたぞ……」
「いや見えませんから。すけてなく……え？」
「見えたと言うておる。ほれ、のろしじゃ」
　気づくと尾根伝いに山の頂に達していた。偲が指す方を眺めやると山の間から煙が一筋細々と上がっているのがわかる。
「本当だ……。やっと着いたんですねオレたち。やった！」
「ああ、あののろしに間違いない」
「よかったあ。オレもうだめかと思いましたよ」
「なにを言っておる腑抜けが。桐ケ谷家の者が上げる迎火じゃ。必ず我らの前に上がると言ったろう。さ、あと一息じゃ。早う進め」
　偲がぽんと背中をたたく。
「お供えのおはぎが楽しみじゃ。あの婆最近また腕を上げおってな。黄粉のは妾が頂くぞ？それに酒もうまいのがあるからなあ。たらふく飲んでやらんと。じゅるり」
　後ろで偲がよだれをすする音がした……。

つづく

第2話

のろしの上がる方へ山道を下っていく。煙は尾根を下った先の谷間から上がっているようだ。
不意に、好基が馬をとめる。
「あれ？そういえば……」
「どうした、なにかあったか」
「ええ、あの煙って毎年ばあさんが焚く迎火のなんですよね？」
「そうじゃよ。我らはみな、あの煙を目印に故郷に帰るのじゃ」
「にしてはずいぶん火が強いんですね。煙があんなに上がるなんて。それにやっぱりあの煙が上がってるところ、実家のある場所じゃないですよ？確かに実家は山の中ですけど、よく見ると明らかに違う場所ですって」
「細かいことはいいから早う進め。目的地はあれに間違いないと妾が言っておるのじゃ。行ってみればわかるさ。ぐずぐず言うな」
言いながら偲は好基の背をバシバシとたたく。早く行きたいのなら人間でなく馬をたたいてほしいものだ。
「腑に落ちぬか？」
「どうにも」
「面倒なやつじゃ。ここはまだ黄泉の領域ということを忘れておるようじゃな。あの煙も場所もこちらでの似姿に過ぎぬ。たまたまあの谷間に現し世への扉が開いたというだけで、現実には婆が玄関先で焚いた粗末な火がこちらではああ見えるというだけの話じゃ」
「あ、ああ。ならやっぱりあの煙のところに行けばなんとなく帰れるんですね」
「そうじゃの。おぬしは話が早くていい。わかっておらぬようだがな」
さらに馬を進めること小一時間ほど。山を下ってようやく煙の上がっていた場所あたりまでやってきた。と言っても、もとが粗末な

焚き火だから見えてからほんの数分で消えてしまっていた。
「この辺りじゃな」
　偲はひらりと馬から降りると、袖口からなにか書かれた紙きれを取りだした。
「のろし、消えちゃいましたね。で、そのいかにも厨二病なお札はなんです？なんかそれっぽい呪文が書いてあるみたいですけど」
　偲はその辺りに落ちていた棒切れを拾ってきて、慣れた手つきで地面になにやら円を描いている。
「現し世に帰るためのまじないじゃ。おぬしにはまだわからぬ。ほれ、降りてきて札を持つのじゃ」
「あ、はい」
　馬から降りて差し出されたお札を受けとる。インドの方の言葉だろうか。なにかわからない文字が呪文のように並べられている。
　偲は相変わらず大真面目に地面になにかの模様を描き続けている。好基の周りを回りながら、それはどんどん複雑なものになっていく。時折、好基の足元にもなにかを書くのか、どけと言って手で押してくる。気づくと偲はぶつくさと口の中でなにか唱えるようになった。
「ねえそれ、呪文ですか？この魔方陣みたいなのといい、偲さんってすごい厨二病だったんですね。なんかの冗談ですか？」
「少し黙っておれ」
　依然、偲は呪文を唱えながら地面になにかを描き続けている。顔を見てみると普段のおどけた様子はなく、別人のように集中している。やがて最後の仕上げなのか、円の中央になにか奇妙な文字を書き込むと、「ふうっ、終ったわい」と年寄りのような声を出してかがめていた腰を上げた。
「お疲れさんです。これで実家に帰れるんですね。“現し世への扉は今まさに開かれたっ！”てやつで？」
「茶化すな。まったく、おぬしはなにかいろいろと悪影響を受けておるようじゃな。中二だとか呪文だとか、固定観念にとらわれておる。大方、アニメやマンガの見過ぎといったところじゃろう。これ

は古代から続いておる術式じゃ。おぬしのような小僧が知った口をきいてよいものではない」
　偲が不機嫌そうに言う。
「え、偲さん、アニメとかマンガとか知ってるんですか？古代の人なのに！？」
「知らぬわ！好基よ、女人にきいてよい言葉というものを少しは考えよ。古代の人とな？人の話は聞かぬし……。おぬし……、よほど妾を怒らせたいようじゃな？……息を吸え」
「え？」
「息を吸えと言った！」
「ちょ、そこでぶち切れぇあがあ！？」
　普段のご機嫌でお茶目な様子とはうって変わって、怒っている偲の顔が見えたと思ったら、突然天地がひっくり返った。
　なにかとてつもなく大きなものに襟首を掴まれて、グイと引っ張り上げられたように地面から足が離れたと思うと、そのまま好基を掴んだ大きな手が、勢いをつけてぶんと遠くに向かって放り投げたといった風に、空中で突然加速してきりもみしながら吹き飛ばされた。
「うぐぁ！？あああああぁぁぁぁぁぁぁ……」
　これでもかとばかりに回転していた視界は、次第に暗転していった……。

つづく

第3話

「ごぼあぁ！？」
どさりといういやな音と、誰かが吐いたような気味の悪い声（多分自分の声）を聞いて、好基は目を覚ました。
「いってえ……」
体の至るところが痛む。一体なにが起きたというのだろう。
「おーい好基、大丈夫か？」
確か偲を怒らせてしまって、それで変な魔法が……。
「下手くそな着地じゃのう。無様に這いつくばりおって、ほれ、大したことじゃないからさっさと起きろ」
地べたに転がる好基を偲が見降ろして足でつついてくる。まったく容赦がない。
「ちょっと、なにするんですか！一体なにをやったんです！？いってて……」
痛む体にムチ打って、好基はガバっと身を起こした。すると犬を蹴るような態度だった偲が急に心配そうな顔をして好基をのぞきこんできた。
「おっと痛むのか？怪我などしておらぬよな？」
「平気ですよこれくらい。それより、なんだったんですか今のは？」
好基は立ち上がって砂埃を払った。体は痛いが実際大したことはない。高い所から落ちたようだが、あれだけ派手にひねりを加えて投げ飛ばされたにしては、少しの打ち身ですんだのは不思議だ。
「ああ、すまぬな。最初に言った通り、現し世に帰るためのまじないじゃ。加減したつもりだったが、初めてにはちと辛かったか？」
「見てのとおりですよ。もう、そんな簡単に怒らないでください。失礼なこと言ったのは謝りますけど。死ぬかと思った」
「死んだ人間がなにを言うか。それに妾は怒ってなどおらぬぞ」
偲はきょとんとして意外そうに言った。

「怒ったって言ったじゃないですか。それでこんなどぎつい魔法をかけたんでしょう？」
「ああ、あれは演出じゃ。別に失礼でないから気にするな。妾がそう簡単に怒ると思ったか？本当に怒らせたらひどい目にあうぞ。妾は怖いのじゃ」
　偲がいたずらっぽい目をしてすごんでくる。台詞は少しも迫力のない、冗談のような言い草だが、偲が言うと実際に言葉の裏になにかが潜んでいる気がして怖くなる。
「あ、ああ……。演出……だったんですか。それなら、うまくはまりましたね。だって死んだと思いましたもん」
　しかしどこからどこまでが演出だったのか、ひょっとしてあの魔方陣や呪文も演出だったんじゃないかと疑いたくなったが、怖いので好基は訊くのをやめた。
「上々じゃな。死んだと思ったところでもう遅いが、いい余興になったろう」
「オレには刺激が強すぎたみたいです。それで、後学のために教えてもらいたいんですが、偲さんを怒らせたら一体どういうひどい目にあうんですかね？」
「知りたいか？」
「いや、怖いんであまり知りたくないですけど」
「ならやめておけ。おぬしの場合はないと思うが、本当に怒ったらまずひっぱたくよ。変な想像をするな。さ、行くぞ」
　偲が背中を押す。そういえば、現し世に帰るまじないだと言っていたが、ここは本当に……。
「え、行くってどこに？」
「本家にじゃよ。まだ寝ぼけておるのか？」
　言われてみて辺りを見回してみると、周囲の山、田んぼ、生垣と、見覚えのある風景が広がっている。生まれ育った地元の、懐かしい夏の夕景色だ。ひぐらしが鳴いているのが今になって聞こえてきた。
「ああ！ここ家の前の道じゃないですか！帰ってきたんですね、オ

レたち？」
「だから現し世に帰るまじないだと言ったろう。少々手荒になったがおおむね成功じゃ」
　偲に促されるまでもなく、好基は実家の生垣を回りこんだ。おおむね成功だと言うくらいだから少し失敗があったのかもしれない。地面に盛大にたたきつけられるし、その場所も家の裏手だ。多分偲は例年どおり迎火を焚いていたその場所にピンポイントで軟着陸したのだろう。余興のために演出をするくらいだから、なにがどうなれば成功なのかは皆目わからないが。
　ようやく庭の入口まで来ると、そこには迎火の後始末をする祖母と妹の姿があった。水をかけ終わった見覚えのあるじょうろを妹がさげて、二人は家に戻ろうとしている。
「あ、ばあちゃん、美琴！」
　正月に帰って以来だから久しぶりだ。声をかけて駆けよる。しかし二人は好基の声が聞こえなかったようで、そのまま玄関の方へ歩き去っていった。好基はその後ろ姿を呆けたように立ちつくして眺めている。後ろから偲が呼ぶ声がする。
「おい好基、好基よ、こっちに来い」
「ああそうだった……。オレたち幽霊でしたもんね。忘れてた……」
　偲の方を振り返って、好基は寂しそうに言った。
「霊魂な。初めてには辛いかもしれぬがこういうものじゃ。先に言っておくべきだったな。すまぬ」
　真面目な顔をして、偲が謝る。
「いいんですって。自分が死んでることも忘れてちゃ、幽霊にもなれませんよ……」
　好基が肩をすくめて言う。すると偲はフッと笑みをこぼして好基の横まで来て、なぐさめるようにやさしく肩に手をおいた。悪かったな、気持ちはわかると言うように、隣でうんうんとうなずいている。
「偲さん……」

この人もやさしいところがあるんだな。そう思ったら……。
「霊魂じゃ」
そっと耳もとにかけられた言葉はそれだった。偲を見ると、ニシシといたずらっぽく薄ら笑いを浮かべている。
「ああそうですか！らしくもなくこれだけはずいぶんとこだわるんですね！どっちでもいいじゃないですかホントに……」
「よう？作！久しいの。息災じゃったか？」
まったく聞いちゃいない。ぶつぶつと文句を言っていると隣の偲は知り合いを見つけたようで、好基など最初からいなかったようにすたすたと走っていってしまった。
「おお姫さま。もういらしてましたか。今年もお会いできて恐悦に存じます。達者そうでなにより」
やたらと大きな声が聞こえてくる。ずいぶんと丁寧な受け答えだが……。
なんだあの大男は！？見ると偲は見上げるような身丈の初老の男と話している。しかもその男の格好がまた奇妙で、昔の洋館とかにいるような執事のお仕着せを、大きな体にぴちぴちに着こんでいるのだった。

つづく

第4話

「達者もなにもないわ。妾は若いのじゃぞ？言葉を間違ったな？作？」
「ハハハハ、これはご無礼を。姫さまはいつになってもお若いですなあ」
「ウハハハハハ！それも年寄りにかける言葉じゃ。妾も会えてうれしいぞ！」
　偲は楽しそうに大男と肩を叩き合っている。力がこもっていてうれしそう……、いや、痛そうだ。偲はいつも加減しないし、あの大男に肩を叩かれたらがくりと膝が折れてしまいそうだ。
「おい好基、こっちに来るのじゃ」
　偲に呼びつけられて二人の方に行くと、好基に気付いた大男が丁寧にお辞儀をした。近付いてみてわかったが、身長は二メートル近くありそうだ。
「紹介しよう。こやつは好基。此度新盆を迎えた死んだばかりの若造じゃ。妾の従者をしておる」
　ずいぶんな扱いようだ。つっこみどころは無数にあるがひとまず据え置いて、好基は大男に頭を下げた。
「はじめまして、桐ケ谷好基です」
「お初にお目にかかります。私は桐ケ谷家の執事を務めております、杉之下？作と申す者。以後、お見知りおきを」
　この男本当に執事だったのか。家にそんなものがいた覚えはないが……。
「こ、こちらこそよろしくです」
「好基さまのことはもう聞いております。慣れないことばかりでなにかと心労も絶えぬことでしょうが、この度のことはあまり気になさいますな。この？作、新来の若旦那さまにお会いできてうれしいですぞ」

気にすることではないのか……？まあ、言われてみれば案外そうなのかもしれない。それよりも心労と言えば、この偲の従者に今なったらしいことの方を気にしなければならないのだろう、きっと。
「そんなにかしこまらないでくださいよ。？作さんは、桐ケ谷じゃないんですか？」
「私は当家の執事。氏は杉之下なれど家はとうの昔に捨てております。桐ケ谷家の従僕として終生お仕えする身ゆえ、親族のみの集まりにお邪魔すること、お許しくださいませ」
？作がまた二メートルの身の丈を折って深々とお辞儀をした。下げられた頭がちょうど好基の目の前あたりに来る。
「えっと、そんなつもりで言ったんじゃ……」
「？作よ、そんなに改まらずともよい。こやつは妾の従者じゃ」
横から偲が口を出す。
「ハハハ！左様ですか。しかしよかったですなあ。姫さまはかねてから年寄りばかりでつまらぬ、歳の近い話し相手が欲しいと仰せでして。ハッハハハハ！」
？作が楽しそうに大笑いする。今にもあの大きな手が背中を叩こうと飛んでくるんじゃないかと思うと身がすくむ。
というかいかにも死んでよかったみたいな言い草だな？それに歳の近い相手なのかも賛否が分かれそうなところだ。
「余計なことは言わなくてよい。さて、妾はこれから夕涼みに少しばかり散歩に出る。宴までにはまだ時間はあったな？」
「ええ。まだ余裕があります。くれぐれも、お気をつけて」
「うむ。では行ってくる。どうじゃ好基、付き合わぬか？」
偲が一応といった様子でたずねてくる。
「オレ、いつなったんだか知らないですけど従者なんですよね。断っちゃいけないんでしょ？」
「おい、なにをそんなに嫌そうな顔をするのじゃ。気を悪くしたのか？日中暑かったから夕涼みと洒落込むのも悪くはなかろう。それとも、妾と行くのがそんなに嫌か？」

偲が心配そうに好基の顔をうかがう。見ると偲は心底残念そうな顔をしていた。
「別に嫌じゃないですって。行きましょうよ。ようやく涼しくなってきたんだから」
今度は好基の方から偲の背中を叩く。
「そうか。しかし……、気を悪くしたのなら、謝る」
めずらしい言葉を聞いた。偲は相変わらず心配そうに横を向いている。
「気を悪くしてもいません。ほら、行きましょう」
「う、うむ。良い心がけじゃ」
偲はいつもの偉そうな表情に戻って歩き出した。
「ああそうだ、？作」
「はい姫さま」
「酒は？」
「ぬかりなく。姫さまのお好きなものを」
「用意してあるな？」
「姫さまがご心配なさる必要はないかと」
「うむ。そうじゃった。楽しみにしておるぞ」
？作が深々と頭を下げる。
「行こう好基」
「へ～い」

つづく

第5話

桐ケ谷の実家は田舎で山の中にある。散歩と言っても家の周りの田んぼと用水路と小川の間にある畦道をふらふらするだけだ。

日が暮れ始めた空はきれいに赤く染まっている。日中が暑かっただけに時折吹いてくる夕風が心地良い。

「この辺りも昔とちっとも変わらんのう」

偲が歩きながら懐かしそうに言う。

「田んぼしかないですからね。でもいつから変わらないって言うんですか？もしかして偲さんが生きてた時から？」

「そうじゃな。小さい頃はよくこの辺りで遊んだものじゃ」

偲は昔を思い出すように辺りを眺めている。

「へえ、その小さい頃って一体いつ頃の話なんですかね？ちょっと気になったんですけど」

「好基よ、妾の歳は聞くな。話の流れは良かったが出直しじゃ。百年早い」

偲が鋭く返してくる。

ダメだったか。以前にも偲がいつの時代の人なのかそれとなく聞いてみたことはあったが、まだ教えるつもりはないらしい。

「そうですか。でもまあ、オレなんかは百年どころじゃなく二百年も三百年も早そうな気がしますけどね」

「言うな小僧。おぬし、やはり口のきき方に気をつけた方がよいな。女人に歳を聞くときはもう少しうまくやるのじゃ」

「ごめんなさい。失礼と知って聞きました。次はもう少しうまくやります」

「それはわかっておるよ。だがおぬしは目上をあまり敬わぬようだし、口のきき方もいいとはいえぬ」

怒らせてしまったか、そう思って顔をのぞいてみると、偲は逆に楽しそうに口許をほころばせていた。

「だがその歯に衣着せぬ物言い、心地良いわ。そこのところに免じて、いずれ教えてやってもよい。妾は出直しと言ったからな」
「そ、そうですか。じゃ楽しみにしてます」
「うむ。桐ケ谷に限らずまわりが堅苦しい老人ばかりでは気が滅入るというものじゃ。だからおぬしは今のままでよい。しかしおぬしも趣味が悪いのう。そんなに妾の歳が知りたいか？」
　偲がいたずらっぽく言う。怒っていないようでよかったが、普段がご機嫌なだけに怒らせるような真似はしたくない。好基は自分の言ったことを後悔した。
「いや、失礼しました偲さん。野暮なことを聞いちゃって、オレたち同じ早死の幽霊ですもんね。歳だなんて今さらですよ。ハハハ」
「ウハハハハ、おぬしはやはり目上を敬わぬのう。おっと、ほめておるのじゃぞこれは」
　偲に昔のことを聞こうとしても軽く笑ってあしらわれる。しかし偲は笑うのをすぐにやめて、昔のことを思い出したのか急に悲しそうな目をして、遠くを見るようにしながら足早に先へ進みだした。好基も遅れながら続いていく。
「偲さん？」
「少し、寒くなってきたのう、好基」
　偲は昔の記憶をたどるように、まだ遠くを見ながら言った。
「あの、なにか思い出したくないことが……？」
「霊魂じゃ」
「え？」
「幽霊ではなく霊魂じゃ。言っても無駄かもしれぬが間違ってはならぬ」
「あ、はい」
　会話を途中で遮られた。好基はそれ以上追及するのをやめた。
「昔のことはまた、追い追いな」
「ええ。偲さん、これを」
　好基は余計に着ていた羽織を脱いで、偲に差し出した。

「なんだ、おぬしは暑いのか。荷物くらい自分で持てよ」
「いやそうじゃなくて、寒いならこれ着てくださいよ」
「ああ、なんだ、妾に気遣いは無用じゃよ。幽霊は寒がったりせぬものでな」
　偲はにべなく返す。
「でも下になにも着てないんでしょ？寒いですから着てください」
「なんだと？おぬし、どうして妾の下着のことなど知っておるのじゃ！？ぬうぅ、こ、この変態がっ！！」
　顔を真っ赤にして偲は一歩後ずさった。そんなことをされると本気で生きる希望を無くしてしまう（死んでいるが）。
「自分で聞かれてもいないのに言ったんじゃないですか！もう、心配してるんだから素直に着てくださいよ」
「フン、心配とな？この妾を？小僧が、そんなものは自分の尻を拭いてからにするんじゃな。でも、まあ、おぬしがどうしても暑いと言うなら、着てやっても構わぬが……」
　言いながら偲は差し出された羽織を好基の手から奪い取り、背中を丸めて羽織った。
「まったく、素直じゃないですねえ。山なんだから夜は冷えるんですよ。黄泉ではずっと暑かったですけど」
「なんだ妾に説教か？百年早いと言ったろうが」
「ひょっとすると千年くらい早いんじゃないかって気もしますけどね。でも、ありがとうございます」
「どうしておぬしが礼を言う？」
「え、着てくれて、です。風邪なんかひかれても看病するのイヤですから。あ、違うか、荷物を持ってくれて、かな」
「ウハハハハ、一杯食わされたな。まったく、おぬしと話していると退屈せんよ」
　照れくさそうにしていた偲はここで大笑いして言った。
「へへへ、役得ってやつで」
「粋がるなよ。さあ、もうすぐ頃合いじゃな。ぼちぼち、引き返す

としようか」

バンっと偲が背中を叩く。やはり加減はしないようだ。

つづく

第6話

日が沈み、空は赤から群青に変わろうとしている。日中の暑さが嘘のように山から冷たい風が吹いてきた。

家に戻るとどうやら宴会があるらしい。誰がなにを用意するのかわからないが幽霊だけのもののようだ。それにどんな人たちが集まるのかも見当がつかない。当然皆桐ケ谷家の先祖なのだろうが、知っている人はいないだろう。祖父母はまだ健在だし、曾祖父母には会ったことがないからだ。

「ねえ偲さん、今日はどんな人たちが集まるんですか？」

「桐ケ谷家の者たちじゃよ。中には？作のようなやつもおるが」

「大勢ですかね？」

「多少なりとも、な。どうしたんじゃ？今頃になって」

「いや、知ってる人はいなそうだと思って」

「誰か亡くなった親類があれば会えるじゃろう」

「いませんね。オレが一番乗りで片付いちゃったんで」

「ああ、そうか。まあ堅物の老人ばかりだが、おぬしまで硬くなる必要はないよ。皆親類なのだからな」

「そ、そうですよね」

とは言っても、相手は知らない老人たちなのだから実際は序列やら決まり事やら、いろいろ小難しいルールがあるのだろう。顔も知らないから誰から挨拶すればいいのかもわからない。席は、とりあえず末席に座ればいいだろう。酒もついで回らないといけないだろうな。好基は家に戻る道を歩きながら不安にかられた。

バシャッ、バシャッ――――

二人が歩いている畦道の脇を用水路が通っている。そこを流れる水音の合間に、なにかが水を跳ねるような音が聞こえてくる。水の中になにかいるのだろうか。

「おいおぬし、そこでなにをしておるのじゃ？」

偲が一段高くなっている畦道から薄暗い用水路を見下ろしている。人がいるのだろうか。好基も道端から下をのぞいてみる。

バシャッ

暗い用水路の中で、人が水に浸かってなにかをしている。それが急に声をかけられたのにビクっと驚いて顔を上げた。

顔色の悪い男だった。土気色の顔に髪はボサボサと乱れ、髭がまばらに生えている。余程驚いたのか、目を大きく見開いて偲の方を見ながら固まっている。声をかけた方が驚いてしまうようなおかしな風体の男だったが、それがまたおかしなことに口になにかをくわえているようだった。

「おぬし、そんなところで一体なにを食っておるのじゃ？」

食べているのか？こんな水の中で？一体なにを？

偲がもう一度尋ねると、固まっていた男はハッと驚いて口にくわえていたものをポチャンと水の中に落とした。

男は慌てて落としたものを水の中から拾い上げると、それを手にかかげて言った。

「エ、エビガニでげす」

「え？」

思わず好基は耳を疑った。すると男はやにわに手に持ったザリガニをベリッというイヤな音をたてて二つにへし折り、そのまま口に運んだ。

ベリッ、バリッ、バリバリ、……むしゃむしゃ――――

ザリガニが拉げるイヤな音をこれでもかとばかりにたてながら、男はおいしそうにそれをきれいに丸ごと平らげてしまった。

「うへえ……」

好基は暗くてよく見えなかったが（見たくもなかったが）、音だけで胃の底からこみあげてくるものを感じた。

「エビガニとな？うまいのかそんなものが？」

偲は平気そうに言葉を続ける。しかしさすがの偲も気分が悪かったのだろう、少しだが眉を顰めているのが見えた。

バシャッ、男はまた水に手をつっこむ。
「うまいですぜ。なんならご一緒にどうでげすか？まだまだたくさんありますぜ。極上もんでげす。へへっ」
水の中を探っていた手を上げると、またもう一匹、大きなザリガニが握られていた。
そんなものが食えるかっ！？と言ってやりたくなったが、冷たい水の中でうれしそうに、しかもうまそうに食べる男の姿を見て、なぜだか、好基は言う気が失せてしまった。
「いいや、妾は遠慮させてもらうよ。生は好かぬし、硬いやつよりも川魚の方が好きじゃからな」
偲の大人な対応を見て好基は尊敬の念すら覚えた。
「そうですか。そっちの旦那はどうでげすか？」
バシャッと音をたてて、男が好基の方を向く。
「オ、オレも、遠慮しときます……」
「さいですか。ならここはあっしがいただきますぜ。へへっ」
またイヤな音をたてて男はザリガニを貪り始める。好物を前にした子どものようだ。
「なあおぬし、そんな冷たいところで冷や飯など食ってないで、家に帰ったらどうじゃ？今日は盆じゃぞ？」
そういえば、話ができるということはこの男も幽霊ということか。お盆で故郷に帰ってきたのなら、この男の実家も親族も、この近くにあるわけなのだ。
「あっしは、ここでエビガニを食ってるのがいいんでげす。へへっ」
むしゃむしゃとおいしそうに口の中のザリガニを味わいながら男は言う。
「それもいいが大概にして、一度戻れ。親族が心配しておるぞ。どこなんじゃ家は？」
「あっしは……、あっしは、家がねえでげす」
「なに？」
男は二匹目のザリガニを食べ終えて続けた。片方の手はまた新た

な獲物を求めて水の中をさまよっている。
「家はねえんでげすよ。だからけえるところもねえでげす」
それを聞いて、偲の顔が急に真剣になった。
「そうか。妾は桐ケ谷偲という者じゃ。おぬし、名前は？」
「あっし……、あ、あっしは……」
ザリガニを探っていた手が止まる。男は思い悩むように下を向いた。
「どうした。妾はエビガニ好きのどぶさらいの、おぬしの名前を聞いておきたいのじゃ。それとも、妾に名乗るのはいやなのか？いやならいやとはっきり言え！！」
「し、偲さん、どうしたんですか急に？」
偲が突然声を荒げる。偲がこんなに大きな声を出すのは初めて見た。
「いやじゃねえ！！いやじゃねえでげすよ。高貴なお方があっしなんかに声をかけてくだすって、名前まで名乗ってくれた……。いやじゃねえでげす。でも……、でもあっしは、あっしは……」
バシャッと音をたてて男はまた下を向いた。
「わかった。もうそれ以上言わなくともよい。？作！？作はおるか！ちと来てくれ！！」
あの大男が近くにいるのだろうか。それを呼んで偲はどうするつもりなのだろう。男はしょんぼりと水面を眺めている。
「偲さん、一体なんだって言うんです？この人がどうかしたんですか？」
「こやつは自分の故郷も名前も知らぬ。放っておくわけにはいかぬのじゃ」
「つまりただの浮浪者ってことですよね。いいじゃないですか放っておけば」
パチンッ
耳もとで大きな音がして、好基は自分の頬をおさえた。
本当に怒ったらまずひっぱたくよ。おぬしの場合はないと思うが

――――。ついさっきの偲の言葉が、聞こえた気がした。
「黙れ小僧！おぬしが軽々しく判断してよいことではない。それは妾とても同じなのじゃ」
好基は二の句が継げなかった。
「おいエビガニ獲り、そこは冷たいからひとまず上がってこい。今日は大漁じゃったな？」
「へ、へい」
男はバシャバシャと用水路から上がり、畦道に登ってきた。びしょぬれで、見てくれは汚らしいが着ているものはしっかりとしている。江戸っ子の町人といった風情だ。
「おぬし寒くはないのか？日が暮れて冷えてきたぞ？」
「あっしは下司でござんすから、へっちゃらでげす。へへっ」
男は用水路の水を滴らせながら言う。
「そうか。だが風邪をひいたら大変じゃ。これを使え」
偲は羽織っていた好基の上着を脱ぎ、男に差し出した。男はそれを見てヒッと上擦った声をあげ、ガバっと突然這いつくばって平伏の姿勢をとった。
「も、もったいねえでげす！あ、あっしごときが、あっしごときが……、畏れ多いでげす！」
「なにをそんなに畏れる必要があるのじゃ。ほれ、自分で袖を通すのじゃぞ」
偲は平伏する男に羽織をかける。男はまたもやビクッと驚いた。
「き、桐ケ谷さま、なんとお礼を申し上げたらいいのやら。あっし、もうこれで寒くねえでげすよ」
「礼などいらぬ。さあ、平伏せずともよい。面を上げよ」
じゅるるっと鼻をすすって、男は顔を上げた。目からは大粒の涙がこぼれている。
「うむ、よい面構えじゃ。よし、そこに直るエビガニ獲り！」
「ははっ！」
偲がなにを思ったのか時代劇のような芝居がかった声で言うと、

男は再度ガバっと平伏した。
「おぬしはこれより、名を八郎平、氏を蛯沢と名乗ることを許す。蛯沢八郎平！！」
「ははっ！！」
「面を上げよ！」
男は再度、はじかれたように顔を上げる。顔がさっきよりも心なしか引き締まって、凛々しくなったように感じられる。
「あ、ありがたきしあわせ！！」
「名を名乗れ！！」
「ははっ！あっ、それがしは、蛯沢八郎平という者に、ござりまする！！」
「うむ、善哉じゃ。おう？作、来てくれたか。食事の準備があるのにすまぬな」
どこから現れたのか、大男の執事がいつの間にか横に立っていた。
「滅相もない。遅参の程、お許しください。して、いかがなさいましたか？」
「うむ、この者のことなのじゃが」
偲は平伏す八郎平に目をやる。
「出自のわからぬ無縁者じゃ。名は今、妾がやった」
「なんと……」
「蛯沢八郎平という。帰りの手配はしてやれないじゃろうか？」
「それはもちろん。後日、送火の際になってしまいますが」
「構わぬ。では、頼んでよいな？」
「仰せのままに。この？作にお任せください」
？作が大きな体を折ってお辞儀をする。
「すまぬな、いつも世話ばかりかけて。おい八郎平、こっちに来い。話がある」
「へ、へい」
八郎平は偲と？作の前まで走り寄り、またしてもガバっと平伏した。

「平伏さずともよい。同じ幽霊じゃろうが」
「も、もったいないお言葉でげす。親方さま」
「いつから妾の家臣になったのじゃおぬしは。よいか八郎平、よく聞け。妾はこれより三日後の夕刻、おぬしのエビガニの獲れ具合を見にもう一度ここに来る。必ずこの場所にいるように。よいな？」
「ははっ！必ず！」
「よし、では三日後にな。まあ、妾はエビガニより川魚の方が好きじゃがな。好基、行こう」
芝居がかった一幕も終わったようで、好基は帰ろうとする偲と？作に続く。偲に打たれた頬がまだ痛む。
「それでは私はまだ準備がございますので、先に失礼いたします」
深々とお辞儀をして、？作はどしどしと家に向かって走っていった。
日は完全に沈み、辺りは群青から月明かりに照らされた淡い色合いに変わっている。歩きながら後ろを振り返ると八郎平がまだ平伏の姿勢をとっていた。

つづく

第7話

「偲さん、あの、さっきは……」
家の玄関先まで来て、ようやく好基は意を決して偲に声をかけた。それまでずっと、二人は無言で歩いてきたのだった。
「おう？作、早いんだな。妾ははらぺこじゃ」
偲は一度気付いたような素振りを見せながら、露骨に好基を無視してすたすたと玄関を上がっていってしまった。
「お待ちしておりました姫さま。寒くはございませんか？ささ、中へ」
「うむ」
偲の姿が家の奥に消える。
「好基さまもどうぞ」
「あ、はい」
偲がこんなに機嫌を損ねたのは見たことがない。本当に怒らせてしまったのだ。自分の、心無い一言のせいで……。
「すまねえ！遅くなったぁ！！」
突然どたばたと人が走ってくる音がしたと思うと、好基の真後ろで大きな声がした。
「お帰りなさいませ好藏さま。宴席はこれからにございます。さ、中へ」
「おおそうか。間に合ったじゃねえか」
好藏？聞いたことのある名前だ。後ろを振り返ってみると、そこにはいかにも外仕事をしている風体の、日に焼けた男が立っていた。年寄りではない。四十代前半といったところだ。頭には白タオルをターバンのように巻いている。
好藏は目の前に立っている好基に気付いていながら、そのすぐ横を邪魔な電信柱をよけるようにさも自然そうに素通りして、玄関へ入っていく。

「あの、好藏さん！」
「あん？」
好藏は玄関で足袋を脱ぐ手を止めて、好基の方を見た。
「オレ、好基です。会うのは初めてですけど、えっと……」
「ああ？そんなの知ってるよ。好基、なにそんなところで突っ立ってんだ。早く中に入れ」
「はい……」
好藏は脱いだ足袋を端に揃えて中に上がる。しかしそこでぴたりと動きを止めた。
「あれ？おい好基、おめえ、今オレと話をしたか？」
「ええ、しました」
「オレの声、聞こえるのか？」
「はい、聞こえます」
「お、おう」
おっかしいなあと頭をかきながら好藏は中の酒席に向かおうとする。しかしそこで再度、ぴたりと動きを止めた。
「てえことは、おめえもこっちの仲間ってことじゃねえかよ！？」
「そうなんですよ。だからよろしくお願いします」
好藏は好基の言葉にひどく大げさに驚いた。
「お、おう、そうなのか……。そうならそうと早く言えよ紛らわしい。まさかおめえがくたばってるとは思わねえからさ。そんじゃ中に入れ。多分席はオレの隣だ」
「はい」
偲が先に行ってしまって、席をどうしたものかと悩んでいたところに助け舟が来た。好基も草履を脱いで玄関を上がる。玄関といっても急ごしらえのサッシと靴脱ぎ場といったところだ。本当の玄関はすぐ隣にあるが使われていない。なんでも、仏壇の真正面にあるからよくないということで、すぐ脇に代わりをつくって封印してしまったらしい。
その玄関を上がるとすぐに畳の大広間になっている。そこにはす

でにテーブルが並べられていて、父や祖父、それに妹、さらに見知った親類たちが顔をそろえている。
　好基は妹の美琴に目をやる。その隣に好基の席はない。それにこうしてテーブルの前で立ち尽くしていても誰も好基に気付くことはない。今日は一年に数度しかない親族の集まりだ。それに、好基が死んでからもう二カ月が経とうとしている。湿った様子はないし、和やかな雰囲気で楽しそうだ。その中に、自分は入れないのだと思うと、好基は寂しい思いがした。
「おーい好基、こっちだ、ここに座れ」
　好藏がもう席について手招きをしている。
　大広間は二部屋になっていて、間の襖を取り払えばひと続きにすることができる。その片側に、また別のテーブルが並べられている。そこに居並ぶ面々は老人ばかりで、知っている顔は偲と今会った好藏くらいのものだ。これが幽霊側の宴席なのだ。去年までこんな席が隣の部屋にあるとは知らなかったので、多分こちらの人間には見えていないのだろう。不思議な話もあったものだ。人間がこうして酒を飲んでいるすぐ隣で、幽霊も同じように酒席を囲んでいたとは。
　好基は好藏がたたく座布団に腰を下ろす。二列に並べられた長机にはもう人員がそろっている。三十人弱といったところか。本当に年寄りばかりである。四十がらみの好藏が若いと言えるくらいのもので、偲や好基がいかにも浮いた存在に見える。好基の席は、予想通り下座の末席だった。
「ええと、好藏さんは確かオレの……」
「ああ、大体、おめえのひいじいさんになるんだと思うぜ。あすこにいる功がオレのせがれだからよ」
　好藏が好基の分の酒を注ぎながら言う。功は好基の祖父だから確かに曾祖父に当たるわけだ。
「やっぱり、それで、オレの名前は好藏さんの字をもらってるらしいんですよ」
「うれしいか？」

「え？」
「へっ、なんでオレみてえな碌でなしの名前なんてもらわなきゃならなかったんだか。残念なやつだな」
好藏は面白くもなさそうに言う。
「さて皆の衆、そろそろ集まったところで始めるとしよう。乾杯の音頭だな。それじゃ、例によって偲さん、お願い致す」
好藏と話していると上座に座る白髭の老人が立ち上がった。あの老人が当主なのだろうか。当主と言うのかもよくわからないが。
「おい、どうしていつも妾がやらなきゃならんのじゃ。まったく」
白髭の老人が声をかけると、同じく上座についていた偲がぶつくさと文句を言いながら立ち上がった。手には焼酎だろうか、大きめのグラスが握られている。
「ごほん、皆の衆、よくぞ集まってくれた。会えてうれしいぞ。ここにこうして年寄りがよくも集まってくるのも、ひとえに健康のおかげじゃ。……ううむ、妾は気のきいた音頭はとれぬよ。もうよいな、健康に！乾杯じゃ！」
「かんぱーい！」
そろって年寄りの声が乾杯をさけび、カン、カン、と各自がグラスをぶつけ合って口に運ぶ。
好基は好藏からうまく焼酎が注がれていたが、見渡すと各々が好きなものを飲んでいるようだ。この酒も目の前の食事も現し世の人間には見えないのだから、多分黄泉で普段食べているものなのだろう。それを、誰が用意したのか、こっちで広げて食べているのだ、きっと。
偲を見ると、乾杯をした後立ったまますぐに腰に手をあてて、なみなみと注がれた焼酎をぐいぐいと一気にあおいで、豪快に飲み干してしまった。
「プハッ、うまいのう！ようし、妾は下座じゃ。上座では食わぬ。ほれ、ここの列、ひとつ席をずれるのじゃ。妾は末席で食うぞ」
言われるままに、いそいそと好基の列に座る者がひとつずつ席を

ずれていく。誰ひとり、文句ひとつ言わずに移動していくが、偲は偉そうなことを言いながらもありがとうなとか、腰が痛いところをすまぬなとか、会えてうれしいぞとか、ひとりひとりに礼を言いながら好基のいる下座の方にやってくる。

「久しいな、好藏」

「おう、お互いに」

偲と一言二言、なにか言葉を交わしながら隣の好藏も席をずれる。

「好基、おぬしもずれるのじゃぞ」

自分はどうしたものかと思案していると、偲から命令された。

「え、でも序列がこうなんじゃ……」

「硬いことを言うな。妾が末席じゃ。早くしろ」

偲の有無を言わさぬ命令に圧されて、好基もそそくさと席をずれる。それを見て、偲は満足気に好基の座っていた末席に腰を下ろした。一気飲みしたばかりなのにまた別のグラスをあおいでいる。

「あの、偲さん?」

「なんじゃ」

「今日はペース早くありません?」

「なにを言うか。それを空けろ」

「え?」

「それを空けろと言っておる。早くしろ」

偲が焼酎の瓶を片手に、好基のグラスを指差している。あ、はい、と言って好基は自分の焼酎をぐいと飲み干した。

「ありがとうございます」

「よい。今日は気にせず飲めよ」

お気に入りなのか、偲は持っていた焼酎を好基のグラスに注ぎ、水で割った。飲んでみると相当濃いままだった。

しかし、好基が注がれた焼酎を飲む間も、隣の偲は無口のままで、ひとり黙ってグラスをあおいでいる。

「あの、偲さん、さっきは……」

「おうすまぬ!今行く!」

好基が話しかけると、偲は誰かに呼ばれたのか、さっさと立ち上がってもう片方のテーブルの列の方へ行ってしまった。

つづく

第7話（後書き）

詳しいことはブログに書いてます。お読みいただけたら幸いに思います。

第8話

「おい好基、おしのさんとは仲がいいんだな？」
　偲に無視されて呆けていると、隣の好藏が話しかけてきた。
「え、これでですか？」
「ああ、ちがうのか？」
「いや、そうかもしれないですけど、むしろ従者らしいですよ？オレ」
「ハッハッハ、仲いいじゃねえかよ」
「うーん」
　好藏は豪快に笑って好基の背中をたたく。この人は昔堅気といった感じがする。実際に昔の人なのだが。
「かわいそうにあれは本当に早死で、くたばってこっちに来てから親しい仲間もなく、ずっと独りぼっちで寂しい思いをしてきたらしいぜ」
「そう、だったんですか……」
　普段人当たりがよく、誰からも好かれていそうな偲がそんな悩みを持っていたとは知らなかった。
「同年代の仲間がいないせいだったんだろうよ。おめえは確か、二十だったか？」
「はい。ちょうど二十です」
「じゃあ同い年だな。おしのさんもちょうど二十で死んだと聞いてる」
「え？それは初耳ですよ。年が同じだったなんて……。あ、でも、偲さんはご先祖だからやっぱり同じなわけないですね。昔の人ですもん」
「いやいや、それでも同い年だから仲良くしてやってくれよ。いつもは寂しそうにぐずついてやがるんだが、今年のおしのさんはどこか楽しそうだ。これは、オレからも頼むよ」

「あ、はい。まあ、オレも年の近い人がいないんでお互い様ですから」
自分と同じく二十で死に、同年代の仲間もなくひとりさびしくやってきた……。偲がいなければ、自分もそうなっていたかもしれない。
「ところで、死んだ年は同じでも、偲さんがいつの時代の人なのか知ってますか？オレ、まだ教えてもらえなくて……」
少なくとも自分より前から偲のことを知っている好藏ならなにか知っているかもしれない。好基は尋ねた。
「それはオレも知らねえよ。ここにいる連中の誰も知らないんじゃねえか？本人の口から聞いた方がいいな、こればかりは」
「なんだ。でもそれっておかしくないですか？偲さんと同じ時代の人がこの中にいるんでしょう？」
「それがいねえんだよ。好基、今日ここに集まったのが桐ケ谷の先祖全員だと思うか？」
「え、全員じゃないんですか？」
言われてみて、好基はもう一度宴席を見渡してみる。よく考えてみると、歴代の桐ケ谷の人間がこの三十人程度だけで収まるというのもおかしい気がする。
「全部なわけねえだろ。おしのさんはこの中で最古参だ。だから上座に席があるのさ」
そういえば偲は最初上座にいたし、一番偉そうな髭の老人にも頭を下げられていた。
「偲さんって知ってる人がいないくらい昔の人なんですか。全員が集まってるわけじゃないなら、ここに来てない人もいるんですよね？」
「ああ。あんまり昔の人間はどうしてか知らねえが、いないか、来ないか、慣例上そういうことになってるらしいんだ。全部集まったらえらいことになるんだと思うぜ、多分な」
それもそうだ。偲がいつの人なのかはわからないが、先祖を全て

さかのぼって集めたらそれこそ大変なことになるのだろう。際限がない。それに例えば千年前とか、そんな昔の先祖にはそもそも会うことができるのだろうか。できない気がする。そんなものが存在しているとはどうも想像できない。

「じゃあどうして偲さんはここに？」

「わからねえよ。ひとりでさびしいからなんじゃねえの」

偲には同年代の仲間もいなければ同時代の知り合いもいないのだろうか。

「実際おしのさんは相当昔の先祖で、今さらここに来る筋合いはない、来るべきじゃないと自分でもわかってるのさ。だから上座をあてがわれてもこうして遠慮したりするんだ。それでもこうして毎年来るからには、なにか彼女なりの目的があるんじゃねえかな。オレはそう思うぜ」

散歩のときは昔のことを思い出していたようだが、偲の過去にはなにか難しいことがあったのかもしれない。偲は、昔の話は追い追いなと言っていた。自分なんかがそれを聞いてもいいものなのだろうか。考えながら、好基はもう一度偲がついでくれた焼酎をあおいだ。

「話は変わるが好基、二十そこそこで一体なにがあったんだ？話したくなけりゃ別にいいが」

「ああ、交通事故にあったみたいです。全然覚えてないですけど」

「ははあ、そりゃ大変だったな。いいのか？家族の顔を見ておかなくても」

「いいんですよ。さびしくなるだけですから」

隣の部屋では妹、両親、祖父母、親戚たちが楽しそうに食事をしている。そこにはいるはずの人間がひとりいないという小さくはない穴があるのだろう。でも、それをいつまでも引きずっていてもらっても困るのだ。今日は自分の葬式ではない。

「向こうは向こうで楽しくやってるんだから、こっちも湿ってちゃつまらないです。今日はお盆ですから、死んだ人間のことはたまに

少しだけ、思い返してもらえればそれでいいんです」
　まだなったばかりなのに、我ながらずいぶんと幽霊らしいことを言ったものだ。好基は自分で自分のセリフがおかしくなった。しかし言ってみて、心の底から不思議と、さびしいという思いがこみ上げてくるのを感じた。
「そうか、落ち込んでないようでよかった。まあ、あまり気にしないことだ。そう言うオレはな、へへ、聞いて驚けよ、オレは……」
「ああ、酔っ払ってどぶに落ちたんでしょう？」
「ちっ、知ってやがるのか。自分で言う分にゃいいが、ひとから言われるとひでえ話だなあおい。誰から聞いたんだ？」
「じいさんからです。ごめんなさい、笑い事じゃないですもんね」
「笑い話だよ。今となっちゃあな。細かいことは気にするな。もういいや、ハッハハハ」
　自分の死んだことが笑い話なのか……。本人がそう言うならいいが、この人にかかれば死んだことも細かいことになるわけだ。心の広い幽霊だな。
「いや、笑い話にはならないと思いますけど……」
「おっと、ご本人のお戻りだ」
　好藏が見上げる先を見ると、いつの間に戻ったのか、偲が好基の隣に立っていた。手には焼酎の瓶をまだ持っている。目には、どうも冴えがない。偲は酒豪だがその分酒量も並外れている。なにが気に入らないのか、いつだって酒を前にすると見境なく飲むから困ってしまうのだ。
　早くも好き放題飲んだのだろうか、顔色は変わっていないが、その冴えないすわった目でじっとりと好基をにらんでいる。
「偲さん大丈夫ですか？ほら、座って？」
「むう」
　言われるままに偲は好基の隣に腰を下ろすが、その間もまだ、好基をにらみ続けている。
「偲さん？どろっとした目でにらまないでください。怖いです」

「さっきは……」
「え？なんです？」
偲が好基をにらみながら口を開く。めずらしく歯切れが悪い。
「さっきは……、すまなかった」
「あ……」
言い終えて、ようやく偲はにらむのをやめた。好基が驚いていると、偲はひとりでまた焼酎を注ぎ、適当に水で割って飲み始めた。
「いや、それはオレの方が……」
「それはよいのじゃ。友に手をふるうなど、妾としたことが恥ずかしい。謝るよ」
気のせいでなければ、普段は小僧だの従者だのと言っているのに、今違う言葉がでてきた。偲は相変わらずどろっとした目で目の前の刺身をつついている。友と、言ったか。
「偲さん……」
「なんじゃ」
「酔っ払ってます？」
「黙れ小僧」
偲は不機嫌そうにぴしゃりとはねつける。さっきのはやっぱり空耳だったのだろうきっと……。
「機嫌悪いですね」
「悪くなどない。人が真面目な話をしているというのに、茶化すな」
「失礼しました。でも、オレが謝らなきゃならないです」
「ああ、だがこれでもうよいじゃろうこの話は。妾とおぬしの仲じゃないか。なあ」
偲がまたバシバシと好基の背中をたたく。好基はなんとなく間合いがわかったので背中をひっこめたのだが、いつものとおり偲の手は容赦がない。背中が痛い。
「……あのエビガニ獲りじゃが」
刺身を食べながら偲が少し間をおいて切り出した。
「八郎平、ですよね」

「ああ。あやつは、おぬしにはいまいちわからぬことかもしれぬが、無縁仏だった。放っておいてはいけないのじゃよ」
「ええ、気の良さそうな人でしたし、オレも恥ずかしいことを言いました」
「そうじゃな。あれはいいやつじゃ。だがな、それ以上に、放っておいてはいけない理由があるのじゃ。好基、おぬしにはわかるか？」
　偲はぐいとまた焼酎をあおいで、どろっとした目で好基の方を向いた。
「無縁さま、ですか？丁重に扱わないといけないって確かばあちゃんが言ってました。やっぱり独り身で野垂れ死にはかわいそうですから」
「そうじゃ。あやつは身なりはしっかりしていたし言葉づかいも知っていた。本人が言うような下司ではない、故郷も家族もある、まっとうな人間だったのだと思う」
「確かにいかにも江戸っ子って感じの格好としゃべり方でしたよね」
　それに本当に下司の浮浪者なら、ああした立ち振舞いはできないだろう。
「なら、どうしてああなっちゃったんですかね？家もないし名前も知らないなんて」
「忘れてしまったのじゃよ」
「え、普通忘れますか？そういうことって」
「忘れる。まっとうな人間でも、忘れる。ひとりというのは、そういうものじゃ」
　しみじみと言って、偲は酒をあおる。
「好基、酒が足りぬぞ」
「ああ、今つぎます」
「ちがう、おぬしが足りておらぬのじゃ。ほら、空けろ」
「そうですかよ」
　好基はしぶしぶ自分の焼酎を飲み干した。弱くはないつもりだがこの偲と付き合うのはなかなか難しいのだ。挙句、こうして絡むよ

うにもなってくる。
　偲は好基の焼酎をつくりながら続ける。
「八郎平は、本当に江戸の町人だったのかもしれぬな。それが買い出しか、遊山か、事情はわからぬがひとり家を出たきり、出先で不慮の死を遂げてしまったのじゃ」
「どうしてそこまでわかるんです？」
「推測じゃ。だが、まっとうな人間が自分の名前も故郷も忘れるには理由があるのじゃ」

つづく

第9話

「まあ、そのはずですよね」
「経緯はわからぬ。旅先でひとり客死した八郎平は、その土地の者によって葬られたが、名前も、故郷もわからなかった……」
「ちょっと、どうしてですか？なんかしら身元はわからないものですかね？」
身元不明死体、今で言えば行旅死亡人と言ったところだ。あまり想像できるものではない。所持品である程度は身元がわかりそうなものだし、それにどこの誰かもわからないまま片付けられるなんてあんまりじゃないか。
昔なら、あったのだろうか。現在では、ちょっと想像がつかない。
「わかればああなりはしないさ。好基、おぬしだって事故にあったのが近場でなくて、たまたま金しか持っていなかったら、八郎平のようになっていた可能性はあるのじゃ。めずらしい話ではないぞ」
少し想像してみる。自分は故郷から遠く離れた下宿先で死んだ。そのときは免許証やら学生証やらいろいろと押し込んだままの財布を持っていたからすぐに身元が知れたのだろう。
……身元が知れる？
では、財布も携帯も持っていなかったら、すぐには身元が知れないのだろうか。
自分の場合はひとり暮らしでもバイト先や大学に知り合いがいるから、最後にはわかるのだと思う。それでもやはり調査があって、確証がとれるまでは身元不明死体として扱われるのだろう。
想像すると怖くなってくる。
自分は山登りが趣味で、死ぬ前の春先にも一度、ひとりで登山に出かけた。少し遠かったがハイキング程度のつもりだったので、誰にも行き先を告げていなかったし、確かお金と携帯しか持っていかなかったと思う。

もしそれで、足を滑らせたりしたらどうだろう？
携帯を失くしてしまっていたら……？
八郎平のようになっていた可能性は十分にある。めずらしいことではないのかもしれない。
「でも偲さん、死人に口無しで身元がわからなくても、死んだ当人の幽霊は忘れたりしないでしょう？自分のことくらい」
「いいや、忘れるのじゃ、それが」
「どうしてですか！？オレはちゃんと覚えてますよ？」
「当然じゃ。おぬしは無縁仏ではないのだからな。しかし、死んだ前後のことはよく覚えておらぬじゃろう？」
「え、ああ、それはあんまり……」
確かにあまり思い出せない。ただ思い出したくないからなのだと自分で思っていたが、どうもそうではないようなのだ。実際に記憶がはっきりとしない。覚えていないのだ。
「無理に思い出そうとせんでよいぞ。自然なことじゃからな。妄も似たようなものじゃ」
「そう、なんですか……」
「ああ。八郎平は、そうして無縁仏として氏素性の知れぬまま、旅先で葬られた。あるいは故郷に家族があったかもしれぬ。方々に知り合いがあったかもしれぬ。しかしそれがわからなかったばかりに、どこの誰かもわからぬ無縁者として扱われ、供養された。最悪、誰にも気づかれずに死んだまま、という可能性だってあるのじゃ」
「それは、ひどいです……」
「そうして幽霊になった八郎平は、自分がどこの誰なのかわからなくなってしまっていたのじゃ。不幸にもその地に縁のないものとして死に、はからずも本来自分が属していたところからすっぱりと切り離されてしまった。そうして長い間ずっと独りだったのじゃ。かわいそうなやつなのじゃよ。独りは……、つらいのじゃ」
フゥっとため息をついて、偲はしみじみと酒をすすった。
「そうとは知らずに、オレはあんなことを……」

「事情がわかればおぬしだってあんなことを言ったりはしないさ。気にするな」
「でも……」
「もうよいのじゃ。自分の素性を知らぬ幽霊は大抵そういうものじゃ。放っておいてよいものではない。打ったことは謝る。だから湿るな」
「いやそうじゃなくて、オレもずいぶんな人間なんだなと思って……」
好基は冴えない目をして酒をすすった。
「ん」
「え？」
偲が自分のグラスを差し出してジト目で好基をにらんでいる。
「ん」
「ああ、乾杯ですね」
「ちがうわ。つくづく的外れなやつじゃな。酒が足りぬのじゃ。頼む」
「ああ、そうですかよ」
好基は差し出された偲のグラスに焼酎を注ぐ。水は……、手近に見当たらないのでやめた。そのまま全部注ぐと、偲はそれをうれしそうに口に運び、景気よくぐいぐいとあおった。プハッと言って飲み終えると、グラスをガタンと乱暴に食卓に置き、袖で口をぬぐった。
「お行儀悪いですよ、偲さん」
「おい好基、妾は気にするなと言ったのじゃ。それ以上ぐずついたらもう一度ひっぱたくぞ。よいな？」
「ええ、もう気にしませんよ。だからひっぱたかないでください」
「うむ」
「今頃、当の八郎平はどうしてるでしょうね？」
「大方、またエビガニでも食っておるのじゃろう。さすがの妾もあれには驚いた」

「驚くどころの話じゃないですよ。よく話しかけられましたね？いい人でしたけど」
「ああ、多少は怖かった。でも、話しかけてよかったのじゃ」
確かによかったのだ。あのまま放っておいたら、八郎平はずっと独りのままだ。
「あのまま放っておいたら、八郎平はどうなったんですか？」
「餓鬼道じゃ」
「え？」
「帰る場所も、自分がなんなのかもわからぬまま、地獄に堕ちるのじゃ。あやつ自身なんの咎がなくとも、行く場所のないものは独り苦しみ、いずれ堕ちてしまう。それだけは、絶対に見過ごしてはならぬ」
「そんなことって……」
「哀れなのじゃ」
「ひどすぎます」
地獄とは、生前まずいことをした者が行くところだと思っていた。
「だから名前をやったのじゃ。好基、送火のときには三人で仲良く帰ろう、な？あれは悪い人間ではない。むしろいいやつだから、道中退屈せんじゃろう」
「ええ、そうですね」
確かにやっていることや見てくれはおかしな男だったが、悪い人でもないのに苦しまなければならないなんてひどすぎる。好基は自分の言ったことを改めて後悔した。
また、ちびりちびりと焼酎を飲む。どうして桐ケ谷の人間はこう焼酎ばかり飲むのだろう。きっと隣の人間の酒席でも焼酎が出されているのだ。
「ふう……」
どこからともなく、好基は大きな溜め息をついた。
六月に死んだときのことはよく覚えていないが、こっちに来てから酒の量が増えた。酒飲みの偲のせいもあるが、慣れないことが続

いたからだろう。幽霊になってから酒がうまくなってしまった。
自分は、これからどうなるのだろう……。
とりとめのない不安が、ふと頭をよぎった。
「おい好基、どうした？」
「いや、別に」
「考え事か？酒が足りぬか？なにかあるのなら言えよ？」
「ええ、ちょっと……ね」
「じゃあ飲めよ。水は……、見当たらぬな。まあいいな！気にせずこのままいけ。ほら」
いつの間に自分は飲んだのか、空になったグラスに偲はなみなみと焼酎を注いだ。
「酒が足りないなんて言った覚えはありません」
「口答えするな」
言いながら、好基は焼酎をすする。
「偲さん」
「ん？」
「今日はもういいですけど、今度話、聞いてくれません？」
「湿った話か？」
「ええ」
「構わん。聞いてやるから遠慮せず話せばいい。おぬしの気が済むまでな」
偲は嫌な顔ひとつせずに言った。
「ありがとうございます。意外とやさしいんですね」
「な、なにを言うか。意外とは余計じゃ」
偲は心もち顔を赤くして、ふてくされたように言う。
「なに照れてるんです。まあ今日はいいんですよ。今度また、ゆっくりと……ね」
「フン、食えぬやつじゃ」
むすっとして偲はそっぽを向いた。
「ところで、好藏さんは？」

「ん？ああ、おらぬなあ。便所にでも行ったか？」
偲と話しているうちに、隣で機嫌よく飲んでいた好藏がいなくなっていた。
「まあいいや。あの、好藏さんって本当に、どぶに落ちて死んだんですか？」
「それは、ちゃんと本人の口から聞いたか？」
「聞きました」
「ふむ。その通りじゃよ。酔ってふらついて、この辺りの用水路に落ちたらしい」
「あ、ああ、本当に……」
わかってはいたが、本当に冗談でないとなると、どう反応していいものかわからなくなる。少なくとも笑い話にはならないだろう。普通に考えて。
「別に死んだときのことなどもういいのに、ことあるごとに蒸し返すからなあ、あやつは」
「本人は笑い話のつもりらしいんですけど、ちょっとね……」
「好藏はそうひねくれたやつではないのだが。しかしよく考えてみると変なやつじゃな。確かに笑い事ではないだろうに」
「なにかあるんですかね？」
「あるいはな。あまり掘り返してはならぬぞ。だが本人がなにか話したそうにしていたら、聞いてやれ」
「はい」
そう言えば、好藏はああ言うからには自分が死んだときのことを覚えているということなのだろうか。普通なら思い出したくないだろう死に方を。
自分だったらイヤだ。さっさと忘れようとするだろう。
「なあ好基、ちょっと妾に付き合え」
「え、どこに？」
偲が不意に立ち上がった。
「便所じゃ」

「は？おひとりでどうぞ」
「来い」
「いや、なんで連れションなんてする必要があるんですか！？オレがいくら従者だからって、それはお断りですから！」
「いいから来い。ぐずぐず言うな！」
有無を言わさぬ調子で偲が怒鳴った。いつもの冗談かと思ったがこれはどうもまずい。言うことを聞かないと怒ってしまう。
「お、怒らないでくださいよ……。行きます、行きますから……。まったく、なんだって言うんです」
好基はただちに恭順の意を示して立ち上がった。怒らせてぐずられると始末に負えなくなる。今日はどういう気まぐれを起こしたんだ、この姫は。

つづく

第１０話

渋々と偲の後をついて暗い廊下を進む。トイレには明かりがついている。先客がいるようだ。
「誰か入ってますね。じゃ、オレは戻りますんで」
「待て」
「大丈夫ですよ。まったく、幽霊のくせになにを怖がってるんです」
袖を引っ張ってくる偲にちょっとした捨て台詞を残して、好基はトイレの前を立ち去ろうとした。
「あのなあ好基、あまり妾を怒らせないほうがよいぞ。まだ行くな」
額に青筋を浮かべて偲がすごんでくる。不覚にも、好基は少し怖くなった。
「な、なんなんです？ホントに」
「ここにはおぬしの妹が入っておる」
「ああそうですか。ず、ずいぶん長いですね」
それがどうしたんです、と言おうとしたが、本当に怒りそうなので咄嗟に別の言葉に差し替えた。
――――パチン
なんの前触れもなく、偲がトイレの明かりを消した。
「ちょ、なにするんですか！？」
好基は慌ててスイッチをつけ直した。一体なにをしだすんだこの人は。
「ニシシ」
偲は酔ったジト目にいたずらっぽい笑みを浮かべている。
パチン、また偲はスイッチを消した。
「ニシシじゃねえ！」
偲のあまりのすっとぼけに好基は鋭くつっこんで、すかさずスイッチをつけ直した。ニシシ笑いを本当に口に出して笑うやつなんて初めて見たぞ。

「いいつっこみじゃ、好基。酒が入って冴えてきたな？」
言いながら、偲はまたスイッチに手を伸ばす。好基は即座にその手首をつかんだ。
「いやいや偲さん、ここまでオレを連れてきてなにするんですか！？」
「イタズラじゃよ？」
しれっと言って偲はもう片方の手でスイッチを消す。
「ああもうっ！」
すぐさま好基はスイッチを入れる。
「ねえなんなの？誰……？」
「うぐっ」
「げへへ」
トイレの中から美琴の不機嫌そうな声が聞こえてくる。そう言えばもう何回スイッチを消したんだったか……。隣では偲が下品な笑いを口元に浮かべている。げへへって笑ったろ今。
「お兄でしょ、そこにいるの。なんなのイタズラ？いい歳こいてやめてくんない？バカなの？死ぬの？」
美琴のドスのきいた脅し文句が響いてくる。自分の妹なのに、不覚にも好基は少し怖くなった。
「あ、いけない、お兄は……。お兄……、そうだった」
「あ……」
こいつ勘違いして……。
美琴のしょぼくれた表情が目に浮かぶ。それに自分まで、また死んだことを忘れていた。好基はやりきれない思いがして、うなだれた。
「よ、好基……？」
偲も自分の予期せぬ展開になったことに当惑しているようだ。
「す、すまぬ好基。他愛のない冗談のつもりで、妾もこんなつもりじゃ……」
さっきまで下品な薄ら笑いを浮かべていた偲が急に深刻な表情に

なって、優しく好基の肩に手をおいて顔をのぞきこんできた。
「いや、別にいいんです。美琴もオレも、肝心なこと忘れちゃって……、偲さんが悪いんじゃないですから」
「好基……」
「じゃあ、そ、そこにいるのは誰なのよ？ねえ誰なの？答えなさいよ！」
中で美琴が癇癪を起している。こんなことをしそうな人間は親族の中でも自分くらいなものだから、冷静に考えると普通の状況ではない。声が少し震えているようだ。
「好基、その……、なんと言うか、本当にすまぬ。この落とし前は必ずつけるから許してくれ。謝る」
偲がいつになく大げさに頭を下げる。
「落とし前だなんて物騒ですね。オレは平気だからそんな気にしないでくださいよ……」
「いいのか？許してくれるか？」
偲は頭を下げたままうれしそうに言う。
「大げさだなもう。許さないって言ったらどうするんです？落とし前なんて簡単に言わないでください。仲間でしょ？オレたち」
それを聞いて、偲は突然顔を上げた。さっきと同じ下品な笑いを浮かべている。
「ニシシ」
「え？」
――――パチン、パチン、パチンパチンパチンパチパチパチパチパチパチパチパチパチッ
「ちょ、て、おいっ！！」
「すまぬのう好基、おぬしの妹には本当にすまぬ。だが恒例行事なものでなあ。げへへへ」
「げへへじゃねえ！！」
トイレのスイッチを連打しながら偲は下品に笑う。そしてなおも連打を続けながら片手を口元にあてて、トイレのドアにぴたりと近

づいた。
「ヒヒッ、ヒヒヒ？ヒヒヒヒヒヒヒィッ！？」
追い打ちと言わんばかりに、中の美琴に向かって偲が別人のような声で狂気じみた笑い声を上げた。なんの心の準備もなく突然迫真の狂人笑いを聞かされて、好基まで背筋が凍る思いがした。どこの山姥だよ？
「ヒヒヒでもねえよ！？ていうかどこからそんな声出すんですか！？感じ悪っ！」
「イヤァァァアギャァァ――――！！」
「うわっ」
――――ドタンバタン、ガタガタ……
暗くなったトイレの中から美琴の悲鳴がして、あわただしい物音が響いてきた。
「なんてことするんですか！？」
「だからイタズラじゃよ？」
「しれっと言って、軽くトラウマになっちゃうくらいですよこれって！」
「ううむ、おぬしの妹がなかなかいい反応をするものだからつい……。やりすぎたかな？」
トイレからは暗い中でまだ美琴が悪戦苦闘する音が聞こえてくる。
「だって本当に幽霊の仕業なんだもの。シャレになんないですって。それに今の笑い声、どうやったんです？美琴に聞こえてたみたいじゃないですか？」
「一種の魔法じゃ。多分それらしいものが美琴にも聞こえた」
「ひでえ……」
――――バタンッ
吹き飛ばされたように勢いよくトイレのドアが開いて、中から美琴が転がり出てきた。入口の段差で一度つまづいてころりと転がったと思うと、その姿勢から滑らかな動きで器用に立ち上がり、そのままほうほうの体でトイレから逃げ去っていった。

一応穿いていたものは上げたようだった。よかった。が……。
好基はそのとき、目に涙を浮かべながらも襲い来る幽霊から必死に逃げようとするかのような美琴の真顔を、正面から見てしまった。おまけに、見落としても不思議ではないのに、どうやって穿き損ねたのかわからないが片手に自分のぱんつをぶら下げているのまで目ざとく発見してしまっていた……。
「偲さん、これは重罪です。市中引き回しの上打首獄門です」
「いいものが見れたな」
「……ええ」
なぜかニヤリと急に意気投合してトイレの前で頷き合う二人。
「ヒヒヒ、ぬしも悪よのう。……だが少々やりすぎたな」
「やりすぎですね。偲さん、偲さんってもしかして、もうすごい残念なくらい救いようのないおバカさんなんじゃないですか？こんなこと考えつくなんて」
「そ、そうか？いやあ、へへへ、照れるなおい」
偲が照れ方の見本とでも言うように顔を赤くして頭をかいた。
「ほめてませんから……」
「ウハハハハ、まあよい余興じゃった。なあ、おぬしもそう思うじゃろう？ハハ、ハハハハハ」
「バカじゃないですか？まったくもう、プッ、ハハハハハハハ」
楽しそうに笑う偲につられて好基も笑い出した。廊下の向こうでは、「幽霊が、幽霊が……！」という美琴の涙声、それに続いて、「ぱんつなんかさげてどうしたんだ……」という父の声、そして親族がどっと笑いにわく楽しげな様子が聞こえてくる。
自分の居場所はあちらにはない。でも、新しい居場所はもうこちらにある。そのどちらにも、楽しげな笑いが満ちている。
腹を抱えて笑う偲が、勢いでまた背中をバシバシと叩くようになってきた。いつも通り加減がきかないので飲んだ後の背中には地味にきいてくる。
まだ、吐いたりしないぞ……。

必死に心の中でつぶやきながら、好基はなおも偲と楽しげに笑い続けた。

つづく

第１１話

「いってぇ！」

いつ頃、どうやって寝たのか覚えてないが、翌朝目を覚まして起き上がろうとすると、額を思い切りなにかに打ち付けていた。再び眠りについてしまいそうなくらいの衝撃に好基は身悶えした。

痛む額をおさえて打ち付けた先を観察すると、仰向けになって寝ているすぐ目の前に壁があった。どうやらいつの間にかとんでもなく天井の低い場所で眠っていたらしい。

ここは寝る場所だったのか？どうしてこんな場所で眠らなければならなかったのだろう。もしかして棺桶なんじゃないかという疑問もわいてきた。

あまりに普通でない状況に戸惑いながらも、好基は慎重に狭い寝床から這い出た。

這い出てみてようやく自分の寝ていた場所がわかった。それは天井の低い部屋でも棺桶でもない、昨晩食事をしていた食卓の下だった。

昨晩、よく覚えていないがわざわざこの狭い場所にもぐりこみ、眠った、らしい。あるいは誰かに押し込められたか……。

酔っていたとはいえ、好基は自分の奇行に寒気を感じた。なにか変態的な行為に及んでいたんじゃないかと思うと怖くなってくる。

「おはようございます好基さま」

横で突然大きな声がして、思わず「ヒッ！」と上擦った声が口から出た。本気で体がビクッとするくらい驚いたのだ。振り向くと大男の執事が立っていた。

「お、おはようございます、？作さん、驚かせないでくださいよ……」

にこりと気持ちのいい笑みを浮かべて大男が頭を下げる。

「お姿が見えなかったので心配しておりました。朝方、姫さまが探

しておいででしたよ」
「偲さんが？どうしたんですかね？」
「早起きなさって散歩に出られたようです。ずいぶん探されてましたよ。好基さまはどちらにおられたのですか？」
「ああ、この下で寝てたんです」
好基はバツが悪そうに食卓を指した。
「なるほど、そこなら踏まれる心配もなくゆっくり眠れますな」
？作は家人の奇行を前にしてもさも自然な応対をしてくれる。どうしてそんな場所で寝ていたのか咎めてくれた方がまだ気が楽だ。ゆっくり眠れたのは確かだが、踏まれる心配はしたことはなかった。
「そ、そうですね。じゃあ、それならオレも散歩に行ってきます」
「お気をつけて」
？作がまた深々と頭を下げる。
偲と付き合うようになってからつくづく思う。酒は大概にしておいた方がいいと。昨晩偲に背中を叩かれた後の記憶がさっぱりないのだ。こっちに来てから酒が増えたが同時に忘れっぽくもなった気がする。もしかすると幽霊って忘れっぽいんじゃないのか？
好基は着流しのまま外に出た。羽織は昨日八郎平に渡してしまったのだった。
どこで偲に会えるのかわからないが、昨日と同じコースを歩く。時間はまだ朝だが日はもう高く昇っている。今日も暑くなりそうだ。というかもうかなり暑い。
偲は別の方に行ったのかもしれない。もう朝の散歩とは言えないくらいじりじりと照り付ける太陽の下を脂汗をにじませながらゆらゆらと歩く。昨日の酒が残っているのか、ふらふらしてきた。
小さい頃、この辺りの畦道や用水路でよく遊んだものだ。美琴と一緒にザリガニを獲って遊んだこともあった。
ザリガニ、か……。
昨日ここでそれを生でうまそうに食べていた男のことを思い出して、好基は気分が余計に悪くなった。まさか江戸時代には普通に食

べられていたなんていう話はないよな。
美琴は昨晩、俺のイタズラでマジ泣きしていた。少しかわいそうだったな。でも俺くらい幽霊歴が長くなるとあれくらいやらないと面白くないのだろう。
つくづく生意気な妹だったと思う。顔も見たくないと思ったことだってある。そんな美琴だが、急に兄がいなくなってどうなのだろう。どう思っただろう？悲しかっただろうか？葬式の日のことは、多分その場にいなかったからだと思うが自分はなにも覚えていない。
その葬式の場で、美琴に、だれかに泣いてほしかったってのか？
……いかにも幽霊の考えそうなことじゃないか。
好基は自問しながら、自分のことを嘲笑いたくなった。
あの生意気な妹が兄のために悲しんで泣くなんて想像できない。想像する資格もないな。でも逆を考えてみる。あんな妹でも急にいなくなってもらったらきっと困るのだ。ああ、困るだろう。仲がいいとは言えない、普段話なんかしない、それでも兄妹なんだから、家族なんだから……。
昨日のトイレでのさびしそうな美琴の声。思い出すと自分はよくもこんな簡単に、まるでゲームみたいにあっけなく死ねたものだなと毒づきたくなる。仕方がなかった、どうしようもなかったと片付けようとしている。それでもやっぱり、自分の不甲斐なさに嫌気がさすのだ。
昨日歩いた道をもう一周したが、俺の姿は見えなかった。ふらふらと嫌な汗をかいたが、ようやく目が覚めて気分がよくなってきた。
俺はどこまで出ていったのだろう。わからないが、気紛れな姫は好きにさせておけばいいか。
家に戻ってきた好基はそのまま広い桐ケ谷家の庭をぶらつくことにした。小さい頃はこの広い庭も遊び場だった。
広いと言ってもただ敷地が広いだけで、広々としているわけではない。桐ケ谷家は大工なので作業小屋に物置小屋、それに事務所が敷地内に建てられている。さらに農園もあって、ビニールハウスや

鶏小屋まである。いろいろなものが所狭しと配置されていて、おまけに農機具や材木の切れ端といったものが乱雑にそこらじゅうに転がっているから広い庭なのに足の踏み場もない。
好基はこの庭が好きだった。危ない、怪我をすると叱られながらも、美琴を連れて近所の子たちと遊んだものだ。
偲も昔ここで遊んだりしたのだろうか。そんなことを考えていると、その当人の姿が目に入った。畑の先、庭の隅の方に生えている大きな木の下のベンチに静かに腰かけている。まだこちらには気づいていないようだ。
「偲さん、おはようございます」
声をかけたが返事がない。好基は畑を周りこんでベンチまで行き、偲の隣に腰を下ろした。
偲は眠っていた。昨日の酒が残っているのだろう、木陰に腰をおろして気持ちよくなってしまったらしい。俯いて、安らかな寝息をたてている……。
「うう……、うぅ」
いや、あまり安らかではないようだ。心配になって顔をのぞきこんでみると、眉間にしわを寄せてむしろ苦悶の表情を浮かべていた。
「うう……、あぁ」
額には玉の汗を浮かべている。間違いなくうなされているなこれは。
「偲さん？大丈夫？」
声をかけてみるが反応がない。こういうときはあまり無理に起こさない方がいいとも聞いたことがあるが……。
「偲さん、偲さん起きて！好基ですよ！」
見ていてかわいそうになるくらいうなされていたので、好基は肩を揺すって起こしにかかった。
「う、ああ？なんだ、よぉ～しきか……、むにゃむにゃ」
偲は一度眼を覚ましたような素振りを見せたが、すぐにもごもごと口を動かして寝入ってしまった。

今ので悪夢からは覚めたらしい。表情に苦しそうな様子はなく、すやすやと気持ちよさそうに眠っている。一体どんな夢を見ていたのだろう。なんだとは心外だ。

好基は偲を起こすのはやめにして、ベンチを後にした。

眠りながらあんなにも苦しそうな表情をしなければならない夢とはどんなものだろう。相当な悪夢だったに違いない。あるいは、また昔のことを思い出していたのだろうか。もううなされなければいいが。

「よう好基、散歩か？」

そんなことを考えながら庭を歩いていると、不意に声がかかった。顔を上げるとすぐ前に好藏が立っていた。

「あ、ああ。おはようございます好藏さん」

「おう。これから茶にするから、付き合えよ」

「あ、はい」

「おしのさんは？」

「あっちで寝てます」

「そうか、じゃ寝かせておこう」

素気なく言って、好藏は家に向かって歩き出した。

家の縁側には？作が用意したのか、茶器がひと揃い並べられていた。好基は好藏と並んで縁側に腰を下ろした。

「なんだ、昨日の酒が残ってるのか？」

「ええ、オレはもう平気ですけど、偲さんはあっちの木陰で大汗かいて寝てますよ」

「ハッハハハ、飲みすぎなんだよいつも。それでおめえはよくあれに付き合ってられるよな。大したもんだ」

「いや、実際吐く寸前でした」

「へへっ、そうかい。それとおまえら、昨晩また変なイタズラしただろ。美琴が幽霊におどかされたんだって？」

まずい、昨日のことがバレている。美琴もかわいそうだったが、今になって考えてみるとあれはやってはいけないことだったんじゃ

ないかという気もする。偲は妙な魔法を使うし、幽霊のルールがあったら禁止されていてもよさそうなものだ。
「え、ええ。ちょっと調子に乗りすぎて……」
「ったく、毎年飽きもせずよくやるよな」
「毎年？」
「おうよ。なんかしらイタズラしないと気が済まないらしくてよ、つまらねえことやってうれしがってんのよ、おしのさんは」
毎年か、言われてみれば去年の今頃、美琴の手帳がなくなって（プリクラやシールがベタベタ貼ってあるやつだった）、さんざん探した挙句兄のかばんから出てくるという怪事件があった。妹の写真やらが挟まった手帳を下宿先に持ち去ろうとしたと、あらぬ疑いをかけられてひどい目にあった（あたしの手帳になんの用があるのよ！？この変態！死ねっ！！）が、あれは偲の仕業だったのか……。
「つまらないことしてくれますね……」
「だろ？」
他愛のない雑談を交わしながら二人は茶をすする。縁側で茶を飲むと普段の倍増しでうまくなる。これはこっちに来てから気付いたことだ。

つづく

第１２話

好藏は昔風の人だと思っていたが意外と気さくで話がうまく、むこう（生きていたとき）はどうだったとか、こっちに来てからどうだとか、軽く話を振ってくれるので昨日初対面だったにもかかわらず好基は打ち解けた気分になった。

そうして茶を飲み終わり、一服を終えようというとき、好基は意を決してそれまで考えていたことを口にした。

「あの好藏さん、昨日話した、亡くなったときのことですが……」

「あん？それがどうかしたか？」

好藏はつまらなそうに切り返した。昨日寝る前に歯を磨いたかどうか聞かれたといった答え方だ。

「覚えてるんですか？オレは自分が死んだときのこと、葬式までさっぱり覚えてないもので……」

「ああ、はっきりと覚えてる」

「そうですか。えっと、話したくなければいいんです。だけど……」

「別に構わねえよ。だけどなんだ？」

「その、親父やじいさんは好藏さんの最期のこと、どぶに落ちたこと、酒に酔って自滅したんだって、なんかバカにしてるみたいで嫌だったんです」

「そうか。だけど、現にその通りなんだから仕方ねえだろ。バカにされて当然じゃねえか」

言いながら、好藏は少し表情を曇らせて茶をすすった。

「でも、あんまりじゃないですか。笑い話でもないし、自分の親先祖のことをバカみたいに言うなんて」

「おまえはそう思うか。でもよ好基、功や智が本当にオレのことバカの碌でなしとしか考えていない、そう思うのか？」

「そ、それは違うと思いますけど……。自分の親なんですから」

「本当にバカの碌でなしだと思ってるなら、そのバカの碌でなしの

名前を自分の子に使ったりしねえだろうが」
「……」
好という字をもらうことになった曾祖父はどんな人だったのかと聞くと、酒に酔ってどぶに落ちて死んだんだ、今までそれしか聞かされなかった。なにか他の話を聞かせてくれてもいいのに、聞く度にそればかり言い聞かされてきた。自分はどうしてそんな得体の知れない人の名前をもらったんだろうと、つくづく不審に思ったものだ。
だか本当はどこかで思っていたのだ。父や祖父が名前の字をとろうという人なのだからただのバカの碌でなしのはずがない。実際の当人は立派でなくても、どこかいい人だったんだろうと。
ただ自分は会ったことがないし、いろいろとぼろくそに言われているのが気に入らなかった。幽霊になって本人に会ってみると碌でなしでもバカでもない、人当たりのいい至極まともな人だったのだから。
「自分で言うのもおかしいが、そういう話さ。でもな、あの死に方はやっぱり碌でなしの末路なんだよ。バカにされて当然さ。こっちに来てからずいぶんと言われたぜ。桐ケ谷の面汚しだとか、恥を知れだとかな」
「好藏さんは、碌でなしなんかじゃありません」
曾祖父だからとか、名前をもらっているからとかではない。これは実際に本人に会って、自分でわかったことなのだ。好基は自然と声を上げていた。
「言うなよ照れるだろ。そんなこと言うのはお前だけだ」
好基の言葉を好藏は素気なく受け流した。
しかし現実にはなにがあったのだろう。本当に酒に酔って自滅しただけなら、それほど報われない話はない。
「あの日の夜も、仕事がひと段落したから仲間と一緒に酒を飲んでたんだ。それこそ碌でなしみたいによ、しこたま飲んでバカ騒ぎをしていたのさ」

ひとつ大きな溜め息をついて、聞いてもいないのに好藏は唐突に語りだした。
「ようやく飲むだけ飲み終えて家に戻る道で、例のどぶに差し掛かったんだ」
好藏は好基の方を見ずに、遠くを見るようにしながら続けた。
「そこでオレは、声を聞いたんだ」
「声？」
「ああ、赤ん坊の声だった。暗いどぶの奥の方から、おぎゃあおぎゃあって泣き声が聞こえてきたんだ。助けねえとって、オレは思った……」
話し終えると好藏はもう一度茶を注ぎ、静かにすすった。
突然語られた真相、これが好藏の最期だったのだ。
「オレは酔っ払ってたし、どうせありもしねえものを聞いたんだろうよ。この話をしたのはおまえが初めてだが、そう思われても仕方ねえ。結局、酔っ払って無様に自滅したって話には変わりねえんだ」
「でも……」
「他人はオレのことをバカだの碌でなしだのと言う。でもな、オレは自分のしたことに今も自信を持ってる。たとえ幻でも、他人からなんと言われようとも、オレは自分のやれる正しいことをしたんだってな」
湯呑をおいて、好藏はさっと立ち上がった。
「自分のすることには自信を持つことだな。それが自分のやれる正しいことだと思ったのならさ。自分のすることを自分が信じられないんなら、誰がてめえのことを信じるんだ。……それが、碌でなしの言い分だよ」
「はい」
「ちっ、ガラにもなくつまらねえ話になっちまった。じゃあな。……ああそうそう、茶は片付けなくていいからな！」
軽く舌打ちをして、好藏はすたすたと立ち去っていった。
本人がなにか話したそうにしていたら、聞いてやれ。昨日の偲の

言葉がふと思い出された。
これだけ聞ければ十分だ。好基は今まで得体が知れず、気味の悪い思いがしていた名前の字のもやもやが取れた気がした。

「ああここにいたか、好基」
茶を飲み終え、自分もそろそろ行こうかというときに突然背後から呼ばれた。驚いて振り向くと、白髭を長々と生やした老人が立っていた。確か昨晩上座にいた人だ。好基は慌てて立ち上がった。
「よいよい。茶でも飲もうか。ほら座れ」
言われるままに、好基は老人と並んで腰を下ろした。
「昨晩は失礼いたしました。新参の好基です。遅ればせながら、よろしくお願いします」
好基は縁側に頭をつけた。昨日上座にいたのだから当主かなにかなのだろう。どれだけ偉いのか見当もつかないが、とにかく普通のじいさんではないはずだ。昨晩はしようとしていた挨拶を偲に絡まれっぱなしで忘れてしまった。それも今の今まで忘れっぱなしだったのだ。これはまずい……。
「うむ。今どきの若いもんがそうかしこまるな。一緒に茶にするんだから普通に座ってさっさと注げ」
「は、はい！」
怒ってはいない様子だが、老人はしわ深い顔をピクリとも動かさずに命令する。好基は跳び上がるようにして顔を上げ、茶を注いだ。
「昨晩は顔見せもせずに申し訳ありませんでした。当主さま」
「ああ、偲につかまっとるのが見えたから、これは明日だなと諦めとったわい。それと、わしは当主ではない。当主代行だ」
「当主代行？」
「うむ。現当主は別にいるのだが、桐ケ谷家当主の印を持ったまま行方知れずでな。わしが代行しておる。勘ノ丞という。覚えておけ」
「し、失礼しました。当主代行さま」
当主代行か。いずれにせよどれくらい昔の人なのだろう。好藏は

偲が最古参だと言っていたからこれでも偲よりも後の人ということになるが、威厳ある勘ノ丞の佇まいに好基は縮み上がる思いがした。
「若いくせにずいぶんかしこまった物言いをするやつだ。そう硬くなるな」
そうは言われても、にこりともせずに無表情に話す老人の前でそれは無理な話だった。居心地の悪さを感じながら、好基はちびちびと茶をすすった。
「熱い茶もいいがどうもな。こう暑くてはなかなか風情もない。去年もだったが今年は特に暑いな？」
「ええ、そうですね」
「特にここいらは盆地だからな。今さらだが年寄りにはこたえるわい。今日もこりもせずに暑くなってきおった」
体良く天気の話から入ってくれたようだが、どうも緊張がほぐれない。昔の話を聞いてみたい気もするが、表情をピクリとも動かさない当主代行になにから話せばいいのかわからない。その後も、むこうではどうだったとか、こちらに来てからどうだとか、世間話を振ってくれるのだが、好藏のときのようにうまく打ち解けない。勘ノ丞本人にそのつもりはないのだろうが、無駄に緊張してしまって詰問調に聞こえてしまう。
「ときに好基よ、昨日ここには誰と来た？初めてだったろう？」
「偲さんとです」
「ああ、案内がいたか。ならよかった。偲とは、仲がいいのか？」
「いいらしいですよ。みんなそう言います」
「いつ知り合った？」
「黄泉に来てすぐです」
「なにかあってか？」
「いいえ特に。歳も近かったんで自然と」
詰問調だ。誤解でなければなにかを探り出そうとしているようにすら感じる。
「偲には……、気をつけろ」

「はい？」
突然の言葉に好基は面食らった。今気をつけろと言ったか？なにに？
「あの女には気をつけるのだ」
「それは、どういう意味ですか？」
即座に好基は聞き返した。偲がなにか危険な人間であるかのような言い方じゃないか。冗談でなければ、勘ノ丞はなにを言おうとしているのだろう。
「あれは、昔の人間で本来ここに来るべきではない。知り合いもいないし桐ケ谷の中でも知っている者を見たことがない」
「でも、桐ケ谷の先祖なんですよね？」
「本人はそう言っておる。だが実際はなにもわからないのだ。そもそもいつの時代の者かもわからない。得体が知れぬ」
「それでなにに気をつけろと言うんです？話が見えません」
苛立たしげに好基は返答した。
得体が知れない？これまで考えたこともなかったが、懇意にしている人間を無信用に言われるのがこんなにも腹の立つこととは思わなかった。
「昔わしの知った家に、一族もろとも離散してしまったところがあった……」
話はこうだというように、勘ノ丞は無表情のまま語りだした。
「その家はそれは穏やかな連中が揃っていて、家中の揉め事とはおよそ無縁の気のいい一族だった。だがそれがなにを機にしたものか、ある時を境に一族の中でいさかいが生じるようになり、ひとり、またひとりと家を出ていったのだ。わしの知ったものは皆跡形もなく失踪してしまい、最後には家長夫婦が自害した。殺し合いもあったと聞く」
「それが、なんだと言うんです？」
好基は挑むようにして話を遮った。
「その争いの渦中に、ひとりの素性の知れぬ若い女の姿があったら

しい」
「それで、その話が偲さんとなにか関係が？」
好基が間で口を挟んでも勘ノ丞は意も介せずに話を続ける。
「後で調べたところ、隠り世にはそういう悪さをする妖魅がいるらしいことがわかった。人の間に争いを起こさせ、それを見て楽しみ、食いものにする人外の者だ」
「偲さんは、妖怪なんかじゃありません」
好基は思わず立ち上がっていた。

つづく

第１３話

「わかっておる。わしも杞憂だと思っとるわい。だがな、仲のいいぬしとて、偲のなにを知っている？」
「……」
好基は言葉を詰まらせた。
自分は偲のなにを知っていると言うのだろう。偲は好基のことを友だと言った。好基も偲のことを仲間だと言ったことがある。でもそれは、勘ノ丞に少し疑われただけで揺るがせになってしまうものなのだろうか。偲は、自分のことを聞かれてもなにも答えようとしないのだ。
「わしは家長として、警戒しなければならぬのだ」
「聞き捨てなりません。そういう人を疑う告発は、もっと裏が取れてからやった方がいいと思います」
「ほう、畏縮していると思ったら、なかなか臆せぬ物言いができるんだな。ぬしの言うとおりだ。こういう話があるというだけのことだ。聞き捨ててもらって構わん」
「……お話、承りました」
「偲のこと、信用しているんだな？」
「はい。しています」
それを聞いて、勘ノ丞はようやく鉄面皮だった表情を和らげ、立ち上がった。
「ならいいさ。今度の新米は若いと聞いて、ただの表六玉かと思っていたが違ったようだ。安心した。もう話は済んだ。ではな」
勘ノ丞は茶碗を置いてあっさりと立ち去っていった。
……試されていた？
ひとりになった縁側で、好基は今日何杯目かもうわからない茶を注いだ。庭の木々の蝉の合唱が今になって耳に入ってくる。熱い茶を飲み干して、好基は額の汗をぬぐった。

勘ノ丞が口にした偲への疑い。
偲とは知り合ってまだ二ケ月しかたっていないが、今さら勘ノ丞の言葉を鵜呑みにすることはないとわかっている。妖怪だなんて全く荒唐無稽な話だ。
でも偲は、いつか昔の話をしてくれるだろうか。仲間への信用が、勘ノ丞の言葉でぐらついた気がして、好基は後ろめたいいやな気分になった。

好基はその日の午後もやることもなく、退屈しのぎに近くの池まで散歩に出たりして過ごした（小川に浸かってなにかをしている八郎平の姿が見えたが声をかけなかった）。
先に他界していた近所のおじいさんおばあさんに挨拶をしに行ってみたが、「若いのにどうしてまた……」などといちいち不憫そうな顔をされて話が長くなるので途中でやめた。適当にぶらぶらして家に戻ってみると、偲が待ちくたびれた様子で玄関口に立っていた。遠目にも苛立っているのがわかったが、なにか真っ白な服に身を包んでいるようだ。近寄ってよく見ると、それは左前の死装束だった。白い足袋や手甲もつけているし、頭にはよく幽霊がしている三角形の頭巾まで巻いている。
「ずいぶん顔色のいい死人ですね」
「おい好基、今までどこをほっつき歩いてたんじゃ？」
腰に手を当てて白装束の幽霊が口をとがらせる。上から下まできれいに揃った死装束なんて、どうしてまたそんな格好をしているのだろう。ギャグのつもりだろうか。
死装束を着た女なんて、昔の幽霊画でしか見たことがない。そういう絵に描かれている幽霊は土気色の顔に恨めしそうな表情を浮かべたいかにも不気味なものから、恨めしそうでもどこか寂しげな、切ない様子を見せているものまでいろいろ見たことがある。どれも幽霊とはこんなものだろうという、儚げで（スケスケである）、生気のない若い女が描かれるわけだが、今目の前にいる幽霊は、同じ

死装束を着ていてもそんな幽玄としたものではもちろんない。むしろ正反対だと言っていい。
　生き生きと目くじらを立てていて顔色もいい。つかつかと歩み寄ってきて「おい答えろ」と指を突き付けてくるのだが、その手は冷たいわけではないのだ。
　こんな死装束の似合わない幽霊もめずらしい。
「おい、なにをじろじろ見ている」
「いや、死装束を着てもちっとも幽霊らしくならないなと思って」
「おぬしの考える幽霊がなんなのか知らぬが、我々は幽霊でなく霊魂だからな。それより質問に答えろ。どこにいたのじゃ？」
「ああ、散歩ですよ。手持無沙汰だったんで」
「まったく、呑気なやつじゃ。ハァ……」
　偲はあきれたように溜息をついた。
「なんかあったんですか？そんな格好して」
「法事じゃ。もう終わった」
　ああ、そうか。お盆の法事、あれは幽霊も参加するものだったのか。考えてみれば当然のことだったな。しかしわざわざこんな格好をしなければならないのか。
「えへへ、すっぽかしちゃいましたね」
「バカ者が。おぬしは新盆だろうが。いないでどうする」
「ごめんなさい。まずいですかね？」
「別にまずいことはないさ。あーあ、妾もサボればよかったわ」
　なにもないならよかった。なにかわからない幽霊のルールがあって、例えば黄泉に帰れなくなるとか不都合が起きるんじゃないかと心配になってしまったからだ。
　法事は面倒なのだ。もちろん幽霊のためのものなんだろうからきっとなにか御利益があるのだろうし、罰当たりなことは言いたくない。でも面倒であることには変わりないのだ。それに家に来る近所の坊さんがまた話が長くて、毎度いらぬ説教を始めるから心底嫌だった。幽霊になって初めてサボれたな。

「法事のときはその格好しなきゃいけないんですか？」
「そうじゃよ。幽霊の正装じゃ」
死装束が幽霊の正装だとは知らなかった。言われてみればそうなのかもしれないが、まだ着たことがない。というか、幽霊には違いないのだが、棺に入って青くなっている死人ではなく、実際に生き生きと動いている者が着てるのだからそもそも間違っている気がする。間違いを通り越して滑稽ですらある。
「そうだったんですか。ところで、朝から探してたんですって？」
「おう、そうだった。墓参りに行こうと思ってな。今からでもいい。付き合え」
「え、墓参り？」
思わぬ言葉を聞いて好基は頓狂な声を上げた。
「ああ。墓参り」
「ちょ、幽霊が墓参りっておかしくないですか？冗談ですよね？もうすぐ夕方ですし、本当に行くんですか？」
「行くさ。なにもおかしなことはないだろうに。妾にだって先祖はいる。着替えてくるから少し待っててくれ」
やっぱり幽霊が自分で自分の墓参りをするのはおかしい気がする。お盆時には必ず行っているからあまり違和感はないのだが、なんと言うか、自分で自分の墓穴を掘るみたいな、自分で自分の弔い戦をするみたいな、もっと悪く言えば自分で自分にプレゼントを渡すみたいな、そんな縁起でもない底の抜けた間抜けさがありはしないか……？。
「あ、ちょっと待って」
「ん、なんじゃ」
家に上がろうとしたところで偲が振り返った。どこでどう着替えてくるつもりだろう。
「その服、なんかミスマッチ感があってなかなかシャレてるんで、着替えなくていいですよ。そのまま行きましょう」
「なっ、なにを言っておるこの変態が！は、恥ずかしいだろ」

なにが恥ずかしいんだ？
別に着替えたところで似たようなものを着るのだから特に変化はないだろうに。
中に入っていった偲はすぐに戻ってきた。いつもと同じ夏物の帷子を着ている。朝とは違う、黄色基調に赤い花の模様をあしらったものだった。
「オシャレですね」
「変態に言われてもうれしくない」
「変態しか言いませんよ、こういうことは」
二人は連れ立って桐ケ谷家を後にした。

桐ケ谷の墓は近所の丘の中腹、山道を登り始めてすぐの寺にある。隆造院という寺で、この辺りの集落の墓はみなそこにあるのだ。寺の墓場と言っても広い敷地に墓石が区画分けされて整然と並んでいる市街地の霊園とは違い、林の山道の間にところどころ墓が点在しているといった按配だ。
畦道を横切り、二人は墓のある山道に入った。
木々の生い茂る山道は薄暗い。もう日が西に傾き始めている。この山道は登り始めが勾配が急で登るにはきついのだ。それは幽霊になっても変わらないらしい。二人は話をするでもなく無言のまま、息を切らせながら山道を登る。
お盆時とはいえもうすぐ夕方だからか、墓参に来る人も、幽霊ももう姿は見えない。
ザァっとひとしきり木々を揺らせて、風が一陣吹き去っていく。
日中のうだるような暑さを吹き散らすような冷たい風だった。風向きが変わったのか、湿ったにおいがした。
坂道の途中で、不意に好基は足を止める。
「おい好基、もうすぐだから休憩はしないぞ。おいてくからな」
また冷たい風が吹き去っていく。頭上の木々がガサガサと騒々しく揺れた。立ち止まった好基は来た道を振り返った。

「好基、来いよ」
偲が先に行かずに呼んでいる。
だが、今……、声がしなかったか？
偲の声ではない、前とも後ろともつかず、人気のない山のどこからか、呼ぶような声がした気がする。
風鳴りがそう聞こえただけか……？
おかしいなと首をひねりながら、好基は待っている偲の方へ駆けあがろうとする。

――――桐ケ谷の者よ……。

ぴたりと好基は足を止めた。
女の声が、した。聞き覚えのない声だ。
どこからかわからない。前には偲しかいないし後ろも誰もいない。
風に揺れる木々の間からかすかに聞こえたような気もするし、すぐ近く、耳元で呼ばれたような気もする。

つづく

第１４話

「おい、どうした？」
　偲が坂の上で腕組みをして、いぶかしそうに見下ろしている。偲には聞こえていないのか？
「あ、いや、なんでもないです」
　好基はもう一度後ろを振り返ってから、坂道を駆け上がって偲と合流した。偲は「なにをぼさっとしておるこの腑抜けめ？」と口をとがらせている。
　今の声は幽霊のものだったのか？そうだとしてもこちらも幽霊なのだから聞こえるのは自然なことだ。なのにどこか不気味な感じがした。声のことを聞いてみようかと思案していると、不意に偲が道をそれた。
　山道は中腹に差しかかり、この辺りから道がいくつも枝分かれしていてそれぞれの墓に続いている。桐ケ谷の墓はもっと上のはずだ。好基は声のことなど忘れて偲に追いすがった。
「偲さん、家の墓ってもっと上ですよ？」
「知ってるさ。だが先に行っておく場所がある」
　偲の進む道は好基の通ったことのないものだった。確かこっちは、もう墓参に来る者もいない、昔の墓があると聞いたことがある。
　木のトンネルといった風情の暗い脇道を抜けると、開けた場所に出た。そこには古い墓石が点在しているが、それらはみなすり減っていたり苔生していたりしていて、どれも人の手が入っていないというのが一目でわかる。長い年月のせいで刻まれた字はどれも読めなくなっていて、中には倒れていたり、風化が激しくただの大きな石ころのように転がっているだけのものまである。
　かつてはこれらの石も、亡くなった人を供養するために彫られ、立てられたのだ。墓参りに来る人だっていた。それが今となっては他に新しい墓ができたのか、子孫が絶えてしまったのか、手入れを

するものも顧みる者もなくこうしてただ崩れ去っていく様だけをさらしている。
淋しい場所だ。淋しい幽霊は、人を呼ぶのだろうか。
偲はそんな得体の知れない石の墓場を勝手知ったる顔でずんずん進んでいく。そして奥まった場所の木の下で足を止めた。偲の前にはすり減った古い墓石があった。それは他の多くの墓石と同じで、立てられているというより捨てられて転がっていると言った方が正しい有様だった。
偲はいつの間に用意していたのか、手にしていた花束の中から数輪を、その墓の前に手向けた。
「知り合い、ですか？」
「ああ、そうじゃ」
偲は静かに答えた。
風雨にさらされてでこぼこになった表面には後から彫り直したのか、よく見ると字がかろうじて読みとれる。
「冨樫、家の墓ですか？」
「ああ」
自分の家を差し置いて先に来るような墓とは、どういう知り合いなのだろう。偲はいつになく淋しげな表情をしている。
「さあ行こうか。悪いな、付き合わせて」
ひと通り手を合わせると、偲は立ち上がって好基の背中をたたいた。
「いいえ。でも冨樫ってなんでしたっけ？親戚？」
「ちがう」
「オレは知ってますか？」
「いや、知らない」
「じゃあ……」
「好基よ」
先を行こうとした偲が好基の方を振り返った。その目は真剣そのものだった。

「墓場という場所は、もう会えなくなった者のために、各々がその者への想いを持ってくる場所じゃ。妾はそう思う。それは幽霊になっても変わることはない」
横に並ぶ好基を偲は笑顔で迎える。好基は冨樫家のことを気になりながらも、それ以上追及できなかった。
元の坂道に戻って少し登ると、すぐに桐ケ谷家の墓に着いた。山の斜面に沿って点在する新しい墓のひとつで、眼下には桐ケ谷家を含めた集落が一望できる見晴らしのいい場所にある。
なにも持ってきていない好基はそそくさと手を合わせる。ここに眠る先祖は皆、生前に会ったことのない人たちだ。
「おっと、いけない」
「へ？」
好基の後ろで偲が驚いたような声を出し、年寄りのような仕草で自分の額をぴしゃりとたたいた。
「どうしたんです？なんか忘れたんですか？」
「やあ、花を忘れてきた。ここにおさめる分じゃ」
「え、さっきのお墓にですか？」
「そのようじゃ」
大したことではないが、偲は悔しそうに天を仰いだ。
「しょうがないですね。オレがとってきますよ」
また下ってもう一度登ってくるのは少々しんどいが場所はすぐそばだ。ひとっ走りで行ってこれる。
「それは悪いよ。急がないから一緒に戻ろう」
「いいですって。さっさと戻ってきますから、そこで反省しててください」
「なにさ」
捨て台詞を残して好基は坂道を駆け下りる。さっきの古い墓場へのわかれ道にはすぐに着いた。林の奥へ続くその道は異様に暗かった。つい今しがた偲と通ってきた道とは思えない。道を間違えているかと思って辺りを見回してみるがそれも違う。

ひとりで来てみると、こんなにも印象が違うものなのか。好基は調子のいいことを言って威勢よくとび出してきたことを早くも後悔した。

ひとつ首を振って嫌な気分を振り切り、好基は暗い細道を一息に駆け抜けた。視界が開けて、古い墓が散在する広場に出る。視界は開けたが偲と来たときのように明るくはならなかった。見上げると、木々の間からのぞく空はいつの間にかさっきまではなかった黒い雲に覆われていた。

冷たい風がまた、ザァっと木々を揺らして吹き去っていく。ひと雨来るのかもしれない。

冨樫家の墓に来てみても先ほど供えた分があるだけで、偲の花束は見当たらなかった。通ったところを探してみてもどこにも落ちていない。

……どこに落としたのだろう。見つからないならもう戻ろう。雨が降りそうだし、そこまで執念く探すほどのものでもない。

好基は墓場を後にしようとするが、そこで思い出したように踵を返し、冨樫家の墓の前に戻った。

さっきは、偲が手を合わせているのをただ眺めているだけだった。好基はしゃがみこんで倒れた墓石に手を合わせた。

この古い墓は、周りの多くと同じで百年二百年と手のつけられていないものだ。もしかするともっと前のものかもしれない。偲はこの家とどんな関係があったのだろう。あるいはそれは、偲の生前のことだった可能性もある。

だが偲は、この家の者とは会えなくなってしまった。死に別れたのか、幽霊になった今でも会えないということなのだろうか。

偲は昔の話をほとんどしてくれない。いつか話すと言っているが、偲の過去には他人に言えないなにかがあるのかもしれない。それは友と呼んだ相手にも、隠しておきたいことなのかもしれない。

本人が話したそうにしていたら聞いてやれ。だがあまり掘り返すな。

偲のその言葉は好藏に限ったことではない、偲自身の場合にもそうしてほしいという思いが込められていたんじゃないのか……。
もしそうなら、偲はいつか自分の過去のことを話してくれるのだろうか。
好基は急ぎ足で細道を引き返した。来る時は一目散に駆け抜けてしまったが、今度は足早に進む合間にも花が落ちていないか足元に注意する。
ポツリ、ポツリ
不意に額に冷たいものを感じたと思うと、ばらばらと頭上の木々に水の当たる音がして、これは来たなと思う間もなくザァーっと本降りの雨になった。
好基は軽く悪態をついて走り出した。幽霊というのはぬれてもあまり気にならないらしく、雨が降っても無頓着な者が多いが（偲がそうなのだ）、まだそこまで慣れていない。ぬれれば寒い。
木のトンネルの先にもとの坂道が見えた。そこから少し登れば偲の待っている桐ケ谷家の墓に着く。
――――桐ケ谷の者よ……。
また、女の声がした。
好基は背筋が凍る思いがして、立ち止まらずに細道を駆け抜ける。
――――桐ケ谷の者よ、話がある……。
坂道に出たところで、また声が追いかけてきた。
「話があるなら、出てこいよ！」
不気味だが同じ幽霊なら怖がることもない。好基は気を奮い立たせて声を上げた。
――――クククッ、フフフフフ……
木々の間から女の笑い声が陰々と響いてくる。
「くっ」
好基はじっとしていられず、坂道を駆け上がった。雨は夕立らしく土砂降りになってきた。雲に切れ目はなく、まだしばらくは降り続きそうだ。遠くで雷の音も聞こえる。

桐ケ谷の墓が近づいてきて、ようやく偲の姿が見えたところで好基はぴたりと足を止めた。
墓の前には偲ともうひとり、見覚えのない姿があった。
こちらに背を向けている偲と向かい合ってなにかを話している様子なのは、偲と同じくらいの背格好の若い女だった。その女はちょうどこちらを向くかたちになっていたので、好基はとっさに木の陰に身を隠した。

つづく

第１５話

女は偲と楽しそうに談笑している。偲の知り合いならなにもこそこそと隠れる必要はないと思う。だが、その相手の女は最初にちらりと見て感じたのだが、今もう一度よく見てみればよくわかる。なにかおかしいのだ。

なにがおかしいのかと言われても一言では言い尽くせない。背格好は若い女に違いないのだが、髪は雪のように真っ白で、肌も抜けるように白い。着ているものも白で固められていて、時折黒のアクセントの入った白のワンピースにスパッツという出で立ちだ。

ここまではいいがまだおかしな点がいくつもある。

まず目が、見たこともないような金色をしているのだ。その大きな目は偲と話しながら楽しそうに笑っているが、瞳が、遠目でもわかる、猫のように縦長に切れているのだ。おしゃべりをしている口からは八重歯なのか、人間のものとは思えないとがった歯が何本ものぞいている。

猫のようだと言えばもう決定的なものがある。ボサボサとした白い髪の間からは耳が、猫耳が生えているのだ。

もじゃもじゃと白い毛に覆われているそれは妙にリアルで、つくりものという感じがまったくしない。それもよくコスプレとかで見かけるようなかわいらしいものではない、言ってみれば山猫のようで、どこか野性味のある耳だ。雨にぬれるのが嫌なのか、たまにぴくぴくと神経質そうにふるえている。

そしてさらに決定的なことがある。しっぽだ。

こちらを向いていてよくわからないのだが、背中から明らかにつくりものではないといった風にくねくねと落ち着きなく揺れるしっぽが見えるのだ。先端に紫色のリボンが付いているが、先まできれいに真っ白である。

猫のようだ、と言うよりあれは猫だ。人間のなりをした猫がいる。

そのたたずまいも、まとった雰囲気も、どこか猫のようなのだ。ニヤニヤした笑い方も猫のようだし（猫が笑うかは知らないが）、笑った偲に背中をたたかれそうになって、ひょいと身をかわすしなやかな動きも猫そのものだ。

あれはなんだ、妖怪か？

もう一度目を凝らしてよく見ると、紫のリボンが二つ目に入った。

あの猫、しっぽが二本あるぞ……。

しっぽが二本……。猫又？そんなものがいるのなら、の話だが。

猫女と偲は大降りの雨を気にもかけぬ様子でおしゃべりを続けている。偲の知り合いなら出て行こうと思いながらも、好基は二の足を踏んだ。

マンガやアニメ、それにコスプレのつけ猫耳やつけしっぽはかわいいと思う。だが考えてみてほしい。かわいいと思うのはそれがマンガやアニメやコスプレだからなのだ。現実にその本物を見せられると、かわいいなどと悠長な感想を抱けるようなものではない。

確かにあの毛もじゃな猫耳や二本のリボン付きしっぽはかわいいかもしれない。だがそれが本物となるとかわいいとか萌えとか以前の問題だ。違和感を覚える。それを通り越して異様ですらある。自然と警戒したくもなる。

妖怪……、そんなものがいるとはつゆも思わなかった。偲はどうして妖怪と親しげに話しているのだろう。妖怪と知り合いだなんて、勘ノ丞が知ったらなんと言うか。

今しがたの謎の女の声は、あの猫女の声だったのだろうか。妖怪ならああやって人を驚かすのは本職だろう。

……だが違う気がする。

あの猫なら「話があるニャ」とか語尾に“ニャ”がつきそうなものだし（ぜひついてほしいものだ）、まだこちらに気付いてないじゃないか。

「ニャハハ」

……！今、目があった……！

しきりに木の後ろからのぞき見ていたのだが、あの猫女、いつから気付いていたのだろう、偲と話しながらも今明らかに目線だけこちらに向けて、にまっと笑ったのだ。好基は慌てて再度木の陰に身を隠した。

猫がニャハハと笑えばそれはかわいいだろうと思うかもしれない。だが現実はそんなものじゃない。あんなしたり笑いをされても気味が悪いだけだ。

気付かれたのなら出て行こうか……。偲も今ので気がついて、すぐにも呼びに来るかもしれない。

そもそもなぜこそこそと隠れてなんかいるんだ？あれは本当に妖怪かもしれないが、偲の知り合いならここまで警戒することもないじゃないか。それでもこうして出て行こうとしないのは、どこかで自分は勘ノ丞の言葉を信じたから？偲のことを疑ったから？そうなのか？

ああでも、あの猫女は気味が悪い。もう一度木の後ろから振り返ってみると、偲と猫女は最初に見たときと同じように相変わらずおしゃべりに夢中になっている。

もう行ってみよう。そう思って振り向いていた体を返すと、目の前に黒い影が立っていた。

「あっ……」

驚きのあまり好基は息を呑んだ。驚いたを通り越して胃の中でなにかが宙返りしたような感覚がする。動くこともできず、好基は背後の木に釘付けにされた。

降りしきる雨の音で気づかなかったのか、音もなく忍び寄ったのか、フードつきの黒い長マントを目深に被った何者かが、忽然と姿を現していた。背格好はこれまた偲と同じくらいで、マントの下にはなにを着ているのか、赤と黒のフリルがのぞいている。下も同じ柄の赤と黒の横縞ハイソックスをはいているのが見える。

「桐ケ谷の者、話がある」

彫刻のように立ち尽くしていた影が口を開いた。さっき呼んでい

た声だ。
　さっきからしきりに呼んでいた声の主はこの女だったのか。さっきは遠くから不気味に響いてきた声だったが、今こうして目の前で聞くとだいぶ印象が違う。不気味で冷たい感じのする外見とは裏腹にトーンの高い、なでるようなかわいい声だった。
「話？さっきから呼んでたのは君だったの？」
　知っている人間ではない。気後れしまいと、好基は平静を装った。
「フフフ」
　フードの下の口が笑う。やにわに女は後ろ手に持ったなにかを差し出した。
　それは偲が忘れてきた花束だった。
　どこで見つけたのだろう。届けに来てくれたのか。好基は花束を受け取った。
「あ、ありがとう」
「礼なんかいらない」
　女は吐き捨てるように言った。
　アニメ声にしてはずいぶんクールな返しだ。不気味なのかかわいいのかクールなのかわからなくなる。
「だってわたしが隠してたんだもの」
「は？」
「おかしいなあって探すあなた、間抜けだったわ。それになんか怖がってるみたいだったし、おかしかった。イタズラ」
　なん……、だと？
　どこの幽霊だか知らないがイタズラなどと……、おのれぇ、偲じみたつまらない真似をしてくれる。それにそのアニメ声でイタズラと言ったら、本来ならテへっと笑うところだろうに。
　女はそんな素振りは一切見せずにフードを目深にかぶったままニヤリと口の端を上げた。花を隠したくらいのイタズラでそんなしたり笑いをしてくれるなよ。不気味なのかかわいいのかクールなのかわからないが、おまけにアホなのかもしれない……。

「でもさ、話はこれだけじゃないんだろ？花を失くす前から呼んでたじゃないか」
あきれた様子で好基はたずねた。
「そうそう。こっちに来て」
「ちょっと待て。君はこっちのこと知ってるようだけど、オレは君が誰なのか知らない」
「別に問題ないわ」
名乗る気はないらしい。女は坂を下ろうとする。
「断ると言ったら？」
「またイタズラするわ」
「……わかった。行こう」
また、おかしなのが出てきたな……。
偲と猫女のことは後にしよう。もう花を取りに戻ってずいぶん経つのにまだおしゃべりに夢中になっている。好基は女に続いて坂を下りた。この幽霊も雨のことをまったく気にしないようだ。こっちはもう下着までぐしょぐしょだというのに。
そんなことを考えていると女が急に道をそれた。今行ったばかりの古い墓のある広場に続く脇道だ。
「どこに行くんだ？」
「今、白猫としゃべってたのが桐ケ谷偲ね？」
木のトンネルを先に進む女は好基の問いをきれいに無視した。
「そうだよ」
「知り合いなの？」
「ああ。というより先祖だ」
「ふ～ん、先祖……、ね」
脇道の途中で女は急に立ち止まり、好基のほうを振り返った。相変わらず目深にかぶったフードのせいで表情はうかがえない。
つづく

第16話

「本当に先祖なの？」
女は口の端を吊り上げた。この女も勘ノ丞と同じ疑いを口にするのか。
「そういう君は誰なんだ？」
好基は自信を持ってそうだと言えず、苦し紛れに切り返した。
「あなたに名乗る名はないわ」
「へえ、じゃあ無縁者なんだ？名前ないの？」
容赦なく拒絶されたので（案外ショックが大きい）挑発気味に誘ってみる。しかし女は余裕ぶった薄ら笑いを浮かべるだけだった。
「なに言ってるの？無縁者なのは偲のほうじゃなくて？」
「なに？」
偲が無縁者？でも偲は名前も家もあるし、なにも忘れてないじゃないか。なにをでたらめを。
降り落ちる大粒の夕立の雨が頭上の木々をたたく。それはばらばらと音を立てながらさらに大きな粒となって滴り落ち、二人をうった。
なにか釈然としない。女の言うことがでたらめだとわかっていても真っ向から否定できない。バカなと笑い飛ばせない自分がいる。
それはいつも話している偲のことを、なにも知らないから。いつも一緒にいる偲のことを、どこかで疑っているから……。きっとそうなんだ。好基は唇をかんだ。
「君は、なにを知っている？」
「きっと偲が秘密にしていることも知ってるわ。でも今日話があるのはわたしのほうよ。聞きたいことがあるのもわたしのほう」
フードの下の笑みは素顔が見えないだけに不気味だ。また冷たい風が、二人の間をさっと吹き去った。
「ひゃっ」

不意に暗い木々の間から、目くらましのような閃光が降り、目を覆う間もなくバリバリっと耳をつんざくような雷鳴が頭上を響き渡った。ほとんど鳴っていなかったのに急に近くにやってきたようだ。まだゴロゴロと余韻が響いている。

それよりもこいつ、今ひゃって言ったろ。クールで不気味な様子を見せておきながら耳をふさいでしゃがみこむなんて、ずいぶん怖がりなんだな。

強い光の後でもう一度暗さに目が慣れると、目の前の女のフードがとれているのがわかった。さっきの突風で飛ばされたのか、女はそそくさと恥ずかしそうに手を後ろに回してフードをかぶり直そうとしている。

「あ、ちょっと待って」

我知らず、好基はその動きを制止していた。驚いてしまったのだ。

ようやく見ることができた女の素顔は、偲にそっくりだった。それもそっくりだとか瓜二つだとか生き写しのようだとかですんなり片付けられるようなものではない。まるで同じ型からつくった精巧な複製のように、まったく同じ容貌をしているのだ。

「な、なによ。わたしの顔になんかついてる！？」

「いや、ごめん」

「こっちに来なさいよ」

女はむすっとして、くるりと踵を返して墓場のほうへ足早に歩き出した。フードを上げるのはあきらめたらしい。

顔立ちにばかり目をとられていたが、その後ろ姿を見て気付いたことがある。

髪型が偲とまったく違うのだ。金髪に肩ほどまでのツインテール。髪を染める幽霊も初めて見たが、あんな見事なツインテールはそうお目にかかれないだろう。本当にいるんだな、ツインテール……。

不思議な感動を覚えながら好基は女の後をついていく。声が似ていないししゃべり方も違うから話せば区別がつくかもしれないが、あれで偲と同じ髪型をしたら背格好も同じだし見分けがつかなくな

るだろう。強いてもうひとつ違いを挙げるなら胸だ（重要な点だが）。偲は塗り壁のようだがこっちは……、結構大きい。これは最初から気付いていたがな。

これだけそっくりなのも気味が悪いが、案外区別は容易かもしれない。

「偲とはいつ知り合ったの？長いのかしら？」

「二ケ月前。オレが死んでこっちに来てすぐだ」

好基の前を歩きながら、女は振り返りもせずにたずねてくる。

「なんだあ、あなたって死んだばっかりだったのね。偲とは仲がいいみたいだけど、なんで知り合ったの？とんでもなく歳が離れてると思うけど？」

「逆に歳が近いからだと思う。年寄り相手よりよっぽどお互い気が楽なんだよ」

「ふ～ん」

木のトンネルを抜けて、二人は古い石の墓のならぶ広場に出た。木々が開けた先の空は、日が暮れてきているせいか、それとも雷のせいか、暗く黒い雲が一面にたちこめている。

「ねえ桐ケ谷、あなたは偲のことどう思うのよ？」

この女、偲のことをなにか知っている……。知っている上で、要領を得ないがなにかを探り出そうとしている。

「気の合う仲間だと思ってる」

「仲間？アハハッ、偲って友達できなそうだから驚いたわ」

「友達が少ないのは君のほうだろ？」

「うぐっ、な、なによ！？でたらめなこと言わないでちょうだい」

女はふくれつらをして言った。カマをかけてでたらめを言ってみたらこの反応である。話があるとか言って結局なんの用があるんだ？ひょっとするとただの親類かなにかの幽霊が退屈しのぎに話に付き合わせているだけなんじゃないかとさえ思える。偲に似ているのが気になるが。

「ねえ、じゃあさ桐ケ谷、偲の方はあなたのことどう思ってると思

う？」
「あのさ、どう思ってるのとか、いったい君はどういう回答を聞きたいわけ？ただの世間話とかのつもりだったら、それらしいいい加減な答えをいくらでも用意してやるよ。でもそうじゃないんだろ？君はオレのことも偲さんのことも知っている。知っている上でなにか探ろうとしている。そうだな？君はいったいなんなんだ？急に現れて名前も言おうとしない相手に、これ以上なにか話そうとは思わないな。それからついでに言うと、オレには好基って名前があるからちゃんとそれで呼ぶんだな。そうでなくて桐ケ谷の者ならだれでもいいって言うなら他を当たってくれ。じゃあな」
好基はくるりと踵を返してすたすたと立ち去ろうとする。なんの用があるかはっきりしないし、なによりもいちいち桐ケ谷と呼ぶのに腹が立った。
だがこれは罠だ。本当に用があるならすぐに「ちょっと待ちなさいよ」とか言って呼び止めてくるはずだ。（そこで「ま、まだ話は終わってないんだからねっ」とか恥ずかしそうに口をとがらせてくれればなおよいな）
実際にこの女とは話してみたい気がする。悪さをしようとしているわけではなさそうだし、こっちのことを知ってるなら大したことのない雑談でも付き合ってみるのもいいだろう。なにか知らないことを聞けるかもしれない。それに偲に似ているのだから案外近しい親戚かもしれないぞ。別々に育てられた双子の姉とか？
呼び止めてもらわなくては困る。
好基は怒った様子を見せながらすたすたと女から遠ざかっていく。もうそろそろ声がかからないか？おかしいぞ……。
予想していたタイミングで女の声が飛んでこない。好基は雨にぬれながらもどっと油汗をかいた。止まるわけにもいかないが少しずつスピードを緩める自分がいる……。
「ちょっと好基、待ちなさいよ！」
ようやく背後から声がかかった。それも注文通りのセリフだ。し

かし好基はしめたとほくそ笑む余裕などなく、心底ほっとして胸をなでおろした。待ってましたというように足を止めて、必死にニヤケをおさえて不機嫌そうな顔をつくった後、振り返る。ずいぶん焦らされた気がしたが、女との距離は思ったより離れていなかった。

つづく

第17話

「ま、まだ話は終わってないんだからねっ！」
名前まで呼ばれて満点以上だとニヤケていたら、驚いた。注文どおりじゃないか。焦って損した。
女は腰に手を当てて口をとがらせている。不気味だったりクールだったり、それでいてかわいい声や仕草をしてみたり、要領を得ない話をしてつかみどころのない変なやつだと思ったが、偲のような難しいところのない、案外わかりやすい人なのかもしれない。
「じゃあ、話の続きを聞こうか」
好基は努めて平静を装った。
「こっちに来て」
女は足早に墓場の奥へ向かう。その先はなんとなく予想がつく。さっき偲と来た、冨樫家の墓だった。
「偲はさっきここにお参りに来たわよね？」
「ああ、そうだ」
「自分ちのより先よね？」
「そう……、だな」
それはさっきも不思議に思った。いくら親しい家でも墓参りのときは自分の家を後回しにするものではない。祖母からそう教わった覚えがある。
「ふうん。あの女、やっぱり覚えてるのかしら……。偲、なんか言ってた？」
「いや、なにも。聞いても教えてくれなかった。君は陰からこっそり見てたんじゃないの？」
「ま、まあね。じゃあこっちに来て」
この女はなにが知りたいんだ？なにか知っているようだが偲のことはこっちが聞きたい。好基は黙って女の後に続いた。
女はまた別の墓石の前で立ち止まった。それはこの広場にあるほ

かの多くの墓石と同じで、長い間人の手が入っていない、風化してごつごつになった大きな石ころだった。
「このお墓、さっきは見向きもしなかったわよね。でも好基、これがなにか知ってる？」
「……いや、知らない」
こっちの墓場に来たのは今日が初めてだから知るわけがない。なんだと言うんだ？嫌な予感がする。
別にこの古い墓が特別どうということではないだろう。でも、なにか恐ろしいことを知らされるんじゃないか、そんな気がする。
「きっと偲も知らないのね。いいわ、あなたには教えてあげる」
「なにをだ？」
「偲には内緒よ？」
「……いいさ」
ああ、これは知らない方がいいことに違いない。知らない方がいいことは本当に知らないほうがよかったと後で思うものだ。
真実を知らされるのは恐ろしいことだ。それに、自分だって他人に言えない秘密はある。それは偲だって同じことじゃないか……。でもここまで来て引き返せるわけもない。それでもなにかを知りたいと思う。背中を今さらのように冷たいものがつたうが、それが雨なのか汗なのかわからなかった。
「この墓石、倒れちゃってるけど裏を見てほしいの。ひっくり返してみて」
ためらおうとすればいくらでもできる。しかし好基はすぐに倒れた墓石の前にかがみこんだ。ぬれた服がべたついて動きにくい。かがんだせいで頭から汗まじりの雨水が頬をつたう。好基は横になった墓石に両手をかけた。
「いけそう？重い？」
女がすぐ横に来て膝に手を当ててのぞきこんでくる。見た目より結構重いがそうやって言われたら弱音は吐けない。
「大丈夫、いけそうだっ！」

ひと息に力を込めると、墓石はゆっくりと立ち上がった。しかしもとが円筒形なので頭をおさえていないとまた倒れてしまう。
「泥がついててよく見えないわね」
「おさえておくからはらってくれよ」
「イヤよ。手が汚れるじゃない。おさえとくくらいわたしがやるから、あなたがはらいなさい」
「……はいよ」
墓石の上におく手を女と交代すると、好基はしぶしぶと泥をはらい始めた。石の表面はでこぼこしていて意外ととがっている部分もある。力を入れて泥をはらうと手を切ってしまうかもしれない。女にやらせなくてよかった。
「読めた〜？」
「ああ、字は読めそうだ。ちょっと待って」
土に埋まっていたせいか、刻まれた字ははっきりしている。だがいかんせん暗くなってきたせいでそれがよく読めない。
「暗くてよく見えないな、えっと……」
もう少しで読める……。好基は泥で汚れた手をはらって顔を墓石に近付けた。
「ひゃっ！」
「あっ」
一瞬、辺り一面を昼間のように照らす閃光が二度ほど明滅し、それと同時にピシャッ、バリバリ、という耳をつんざく轟音が鳴り渡った。
女の支えを失った墓石はベシャッと好基に盛大に泥をはねかけて倒れた。女は目をぎゅっとつむり手で耳をふさいでしゃがみこんでいる。急に手を離されて、危うく倒れこんだ墓石に挟まれるところだった。
「おい、こっちが驚くじゃないか！」
「あ、ご、ごめん。びっくりしちゃって……。手とか挟まれちゃった？」

「平気だよ。泥だらけだけどね」
「字、読めた？」
「ああ、それが……」
読めたのだ。明滅した稲光に照らされて墓石が倒れる一瞬に、墓に刻まれた文字を好基は読めてしまったのだ。
「なんて書いてあった？」
「桐ケ谷家……、そう書いてあった」
この辺りには桐ケ谷家は一軒しかなかったはずだ。どういうことだろう。今の墓石ができる前の古いものだろうか……。
「あ、やっぱり！これだったんだ～」
女はうれしそうにパチンと手をたたき、そのまま墓に向かって手を合わせた。
「ありがとね、見つけてくれて。わたしひとりじゃ持ち上げられなくって。助かったわ」
「ちょっとどういうことさ、これが桐ケ谷の墓だって知ってたんじゃないのか？」
「多分これだとは思ってたんだけど、確認できなかったの。驚いた？」
ああ、それは驚いた。墓参りに熱心な祖母も、昔の先祖のはずの偲でさえも知らない墓があったのだ。それを見ず知らずの幽霊に教えられるなんて。
「この墓はなんなんだ？うちの墓なの？それとも別の桐ケ谷家？」
「間違いなくあなたの家のよ。桐ケ谷って今も昔もほかにいないもの。今の新しいお墓が上にできる前のものね、これは」
「どうして君はそんなことを知っている？」
「……さあね」
「もしかして、君も桐ケ谷の……？」
「……」
女は黙ったままそっぽを向いて答えようとしない。
いつの間に日が暮れたのか、空は黒い雲に覆われたまま辺りには

夜の暗闇が落ちようとしている。
「偲が手を合わせた冨樫家のお墓と、この桐ケ谷家のお墓は見てのとおり同じくらい古いものだわ。つくられた時期も同じくらいかもしれないわね」
「そうだな、どれくらい昔かは見当もつかないけど」
「偲は見当もつかないほど昔の人間よ。あの知る者もいない古い冨樫のお墓を知っててお参りをするくせに、この桐ケ谷のお墓を知らないなんてことあるのかしら？自分ちよね？」
「そ、そんなことオレに聞くなよ。冨樫家は家が絶えちゃったのかもしれないけど、桐ケ谷家は新しい墓があるんだからそっちに行けば済む話じゃないのか？わざわざ古い方も行く必要はないじゃないか。意味ないだろ？」
「意味はあるわ」
毅然とした表情で女は好基を遮るように言った。その目は射るように好基をにらみつけている。
「どうして？新しい墓をつくったら、そこにそっくり全部移すんじゃないのか？もうここにはなにもないんじゃ……？」
「それはわからないわよ。掘り返して移したかどうか、この下に今もなにか埋まってるかどうか、それってわかることかしら？」
「じゃあ、ここにはまだ桐ケ谷の先祖が眠ってるかもしれないってこと？そんなことってあるのか？」
「あるかもね。仮に全て新しい方に移されていたとしても、このお墓が意味ないなんて偲に言えるのかしら？そりゃあなたみたいな若造なら言うかもしれないわ。でも桐ケ谷の先祖はかつてこの石の下に葬られたの。この石が、彼らの墓標なのよ。意味がないなんて言わせないわ」
「じゃあ偲さんは……」
「あるいはここに眠っているかもしれないわね。桐ケ谷の昔を知る人間なら無視できるはずのものではないってあなたでもわかるでしょ？それで別のお墓に先に行くなんてなおさらおかしい。偲はきっ

とこのお墓のことを知らないのよ」
ここに、偲が眠っているかもしれない。ただ無骨な石が転がっているだけのこの土の下に……。
本当に知らないのだろうか。
偲の言った、もう会えなくなった者……、それはこの石の下には眠っていないのだろうか。
「偲って、桐ケ谷の昔の先祖なのよね？それがこのお墓のことを知らないってどういうことかしら？」
「だからオレに聞かれても困るよ。よくは知らないんだ」
「あ、そう。ねえ好基、あなた偲のこと仲間だって言ったわよね？でもその偲はあなたになにも教えてないのね」
嘲るように女は言った。雰囲気が最初に現れたときのような不気味なものに戻っている。
「そう言う君は偲のなにを知ってるんだ？誘導するのはやめてくれ」
「わたしは嘘は言わないわ。さあて、もう用は済んだから帰る時間よ。偲が呼んでるわ」
「なに？」
土砂降りの雨は弱まる気配もなく、暗闇になお激しく降り注いでいる。女に言われて耳をすませると、もと来た木のトンネルの方から偲の声が聞こえてきた。
「おーい好基！どこだ？帰るぞ」
間延びした声とともに、バシャバシャとぬれた落ち葉の上を走る足音が聞こえてきた。
「君は、いったい何者なんだ？結局なにがしたい？」
「えへへ、わたし？わたしはね、この物語のヒロインよ」
女はこの問いを待ってましたと言うように、だがそれでいてしれっと真顔で答えた。不気味な表情を浮かべながらよくも恥ずかしいことを平気で言ってくれたな。このセリフ、素で言うやつを初めて見たぞ。
「質問に答えろ」

「フフッ、わたしはあなたの敵じゃないわ。これだけは覚えといて。わたしは真実の味方よ」
女はもったいぶった動きでばさっと黒マントを翻した。中二病かこの女は……。返されたマントから盛大にはねかけられた雨滴を、好基は頭からかぶった。
「偲には今日のこと、内緒だからね、約束して」
「どうして見ず知らずの君と約束しなきゃならない？名前もまだ聞いてないんだぞ？教えてくれたら約束するよ」
約束なんてしなくても、言えるわけがない。
偲を疑えと言うのか？この女は今日、最初からなにを意図していたのだろう。それすらもわからなかった。
「今は名乗る気はないわ。でも好基、あなたとは必ずまた会う。だからそのときに教えると約束するわ。これでいいかしら？」
「……わかったよ、約束しよう。偲さんにはなにも言わない」
「ありがとっ。またね、好基」

つづく

第１８話

「好基！まだここにいたのか、心配したぞ」
背後から息を切らせた偲の声がかかって、好基は振り返った。女の姿はもう消えていた。
「偲さん……」
心配していたのか。こっちが見知らぬ女と陰口のような真似をしていたときに……。
「まったく、花を探すだけでどこまで行ってたんじゃ。もう帰るぞ」
二人は暗闇の木のトンネルを抜けてもと来た坂道を下る。雨にぬれても無頓着なのは幽霊が、でなくて偲やさっきの女のほうがおかしいんじゃないか。好基は揚々と先を進む偲の後を追いながら、暗くなければ服が透けたのが見えたかもしれないなどと下らない想像をした。
でも別に、どこにも行ってはいないさ。花があるはずの場所に来て、そこで時間がかかっただけだ。偲だって探さなくても相手はいそうな場所にいたのだ。引き返せばすぐに見つけることができただろうに。なにをそんなに心配することがある？
あの女と話をして思ったより時間を使ってしまっているが、偲は別の場所を探していたのか？それとも今の今までずっとあの猫女とおしゃべりしていたのか？
あの謎の女のこと、偲には見られていないだろうか。本当に偲は心配を？
「別にどこにも行ってないですよ。ただ花が見つからなくて、ずっとこの辺りを探してたんです。ごめんなさい、夢中になって時間が経つの忘れてました。待ったでしょ？」
偲相手に隠し事をするのがこんなに気分の悪いものだとは思わなかった。
偲は猫女のことを話すだろうか。

でも白々しい嘘をついて人を試すような言い方をするなんて最低じゃないか。好基は言いながら自分で自分が嫌になった。
「あ、ハハハ、それがな、実はおぬしのいない間知り合いと会って話しこんでしまってな。話に花が咲いてしまってこっちも時間を忘れていた。それで気づいたら雨が降ってきてるわ暗くなってくるわ、おぬしの姿は見えぬわで、心配になったのじゃ」
こっちもだって？どちらも相手をごまかすようにいらぬ説明をしてはいないか？嘘の上塗りをしているようだ。
……いや、偲の言っていることは一応嘘ではない。久しぶりに会った知り合いと、ちょっと話していただけで大したことではない。特に隠し事をしているつもりではない。そう言いたいのだとしたら？
だったら自分もあの女のことを話すべきだ。それも今すぐに。チャンスは今しかない……。
ははは、偲を疑うだなんて、そんなバカな……。
「そうでしたか。お互い、びしょぬれになってなにやってるんでしょうね。急ぎましょうか」
好基は偲の肩をたたいた。
言い出せなかった……。偲よりも、今日会ったばかりの名前も言おうとしない女の方を信用しようと言うのか？……あの女は、今もどこかで見ているのだろうか。例えばあの茂みの向こうとか。
「しかしよく降るなあ？」
「ええ、びしょぬれになっちゃって、気持ち悪くありません？」
「いいや、別に」
「ああ、そうですか……」
「山らしい天気じゃないか。故郷に帰ってきた気がしてくる」
「でも、風邪ひいちゃいますよ」
「好基よ、おぬしにはこの風情がわかるか？」
「……」
風情か……。
水のにおい、遠雷の音、日中の暑さを吹き散らす冷気……。

言われてみてようやくまた、遠くの雷の音が耳に入ってくる気がする。遠くの空の稲光もまた、目に入ってくる。
風情と言われてもわかりそうにない。でも、心に余裕がなかったのだ。
勘ノ丞の疑念、猫又の妖怪、そして謎の女と古い桐ケ谷の墓、気にかかることがたくさんある。だからわかりそうになかった。
「まあおぬしのような小僧にはわからんでもいいさ。だがな、びしょぬれになって気持ち悪いだけが雨ではないよ。雨が降れば雨の風情があるものじゃ」
「雨には雨の、ですか。オレは若輩なんでまだわからないかもしれませんが、でもたまにはこういうのもいいと思います」
「なんだ、わかってるじゃないか。それでいいさ。それだけ言えればおぬしも風流者じゃ」
ご機嫌の偲が好基の肩をたたく。びちゃびちゃとぬれた雑巾をたたいたような嫌な音がした。
「偲さん、少し聞いていいですか？」
「ん？なんだ、改まった顔をして」
偲はいつになくご機嫌で、びしょぬれの顔に笑みを浮かべて好基の方を向いた。いつもの結い上げた髪も、房飾りのついたかんざしもびっしょりとぬれてしまっている。
しかし、なにを聞こうというのだろう。
偲を疑うようなことは口にしたくない。それに偲はきっとなにも教えてはくれないだろう。それは、友と呼んだ相手にさえだ。
でもいいじゃないか。他人に言えない秘密は誰にだってある。それを疑ったり掘り返したりするのは不粋というものだ。そうじゃないのか？
――――さっき話してた猫女はいったいなんなんです？
――――冨樫家って、ただの知り合いですか？
――――桐ケ谷の墓って、あのひとつだけなんですか？
簡単なことなのに聞けない。

ああなんだという、不思議なことはなにもない、自然に納得のできる答えが返ってくるかもしれない。でもそうでなくて、この問いを今偲に投げかけたら、それは恐ろしい現実を掘り返すような不粋でとげを持った詰問になりはしないか。それは、仲間に対して投げつけていいものだろうか。

――――偲さんって、本当に桐ケ谷の先祖なんですか？

あの女は、最後にはこう言わせたいんじゃなかろうか。

「あ、ええと、その……、偲さんって、お姉さんとかいました？すごくそっくりなの。妹でもいいですけど」

言い淀んだ末、好基は自分でもわからない的外れな問いを口にしていた。

「いや、いないが……」

「ああ、そうですか」

ご機嫌だった偲の表情が明らかに曇るのがわかった。

でもあのツインテールをさげた偲の複製が他人の空似だなどと、考えられないことだ。偲のことを知るあの女のことを、偲は知っているのだろうか。

「なぜそんなことを聞く？妾に姉がいると思ったのか？どうして？」

「……」

鋭い切り返しにあって好基は返す言葉が見つからなかった。不用意なことを聞いてしまった。

「妾の姉に会いたいのか？そりゃいれば妾に似て美人じゃろうからな？」

「いや、そうじゃなくて……」

皮肉るように吐き捨てて、偲は先を進む。好基は歯がみをしたまま立ち止まって動けなかった。

「ほら好基、来いよ」

「……」

いつの間にか二人は山道を抜けて、家に続く畦道に差しかかっていた。横に並んだ好基の肩に、再び偲の手がおかれる。それはびち

ゃっという嫌なぬれ雑巾の音をたてたが、なにかを伝えようというあたたかさがあった。
「好基よ、他人に言えない秘密は誰にでもあるものじゃ。それはおぬしにもあるし、妾にだってある……」
「そうですか」
今まで近いと思っていた偲との距離が、一気に遠くなった気がした。偲も好基が疑っていることを勘付いていて、それを疑っている。でも、あの女のことは、言えない……。
「だがな、他人には言えなくても、友になら言えることはあると思うよ」
「え？」
「だから昔の話はな、いずれ必ずする。それはな、おぬしの事を信用しているからじゃ。わかってくれるか？」
「……ええ」
偲のことはよくわからない。考えてることもときどきわからなくなる。でももし偲のことが本当にわからなくなっても、今の言葉だけは信用するんだと思う。仲間だから。
これだけいろんなことを言われて、偲のことを疑うのは自然なことかもしれない。だがその人を信用するかしないかの判断を下すのは最後には自分なのだ。周囲がどうとかではない、自分が信用する人間は自分で決める。好基はそう思う。

つづく

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1198r/

群雲の送火

2011年8月6日03時18分発行